Vocalise

柊　雪華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｖｏｃａｌｉｓｅ

【Ｎコード】
Ｎ９１２８Ｐ

【作者名】
柊　雪華

【あらすじ】
受験に失敗し、嫌々入った高校で孤立しがちな学校生活を送っている林真紀。
卓越した音楽のセンスを持っている真紀は、合唱部を自分の居場所にしていく。
放課後、いつものように音楽室のドアを開けようとした真紀。
そこで「純粋培養音楽少年」と名高い滝島英敏と出会ったことをきっかけに、
恋愛、友情、音楽面でも成長を遂げていく二人の話。

※自サイト「こくりこれっど」より再掲載　ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／ｃｏｑｕｅｌｉｃｏｔ

Suite. 1

「帰りモスにでも行かなーい？」
「あ、行く行く！新しいの出たんでしょ？」
紺のブレザー、紺のスカート。白い丸襟のブラウスに紺のリボン。
「彼女」と同じ、まだ着慣れない地味な制服に身を包んだ少女が二人、教室の真ん中あたりの席でそんな会話を交わしている。
「あんたまたウリやったの？」
「そそ、こないだ会ったオッサンがさー…」
今度は教室の窓際だ。地味な制服には全くそぐわない濃い化粧をした少女が四人群れている。入学してすぐだというのに、制服の着崩し方は三年生の同じような生徒にもひけをとらない。腿がほぼ露になってしまうようなスカート丈は、決してほめられたものではない。事実教師が何度注意したところで無駄なのだ。田舎にも、いや田舎だからこそこういう人間はいるものなのかもしれない。似合わないのに無理に自分を流行に合わせようとする。自分が「都会の人間」になれなかったがために、それに労力を惜しむことだけは決してしない。そして何より、自分にとって本来一番重要であるはずのことをしようともしない。
「彼女」は、それを良いことだとは決して思わなかった。

……ああ、煩い。

うんざりした表情で教室を出る女子生徒が一人いた。制服を校則通り完璧に着こなし、制服に着られることもなく、何よりも制服が似合わないほどにその表情は凛として大人びたものだった。
まるで、全ての人間を俯瞰しているかのように冷たくもあったのだが。
他の生徒とは、それどころかこのクラス、果てはこの学校の実情

に全く合わない少女、「彼女」は、林真紀。クラスの誰とも挨拶を交わすことなく、また挨拶をされることもなく教室のドアを閉め、別棟にある図書館へと足を向ける。もはや挨拶をされないのも慣れたし、クラスでは半分いないものとされているのだから本人は全くそれを気にしない。もう半分だって、自分を見て笑い話のネタにする頭の弱い人間だと思っている。このクラスは、真紀にとっていちいち癪に障りすぎるのだ。

真紀は十五歳とまだ幼いながらも、孤独なのではなく、孤高を貫く少女だった。その姿は見る者が見れば凛と美しく映るが、同年代の少年少女たちはそんな彼女を「ただの暗い女」で片付けてしまっていた。

彼女がこのような高校生活を送るのには、ちょっとした、いや彼女にとっては重要な理由があった。

幼い頃から声楽のレッスンを続け、音楽科のある都会の私立高校を目指した真紀。しかし、試験には不合格。独唱で全国レベルの力を持つ彼女が、である。その一方で勉学も疎かにせず、学年でトップクラスの成績を誇っていたのが幸いだったのかもしれない。彼女はある意味仕方なく、この片田舎にある県立高校、それも文化活動が非常に盛んな進学校を受験し、言うまでもなくトップの成績で合格してきたのである。

しかしながら、彼女はこの学校に於いて、学業でトップになる気など全くなかった。

それは真紀が中学二年の頃だった。全国最優秀賞をとった楽曲を歌い上げた後に舞台に立ったのが、この学校の合唱部だった。人数は少なくとも、彼女達の楽しそうな、それでいて繊細で美しいハーモニーを市民文化祭で聞いたのを思い出す。

あんなに楽しそうに歌っている人たちなど見たことがない。まだ十四歳と、今より更に幼かった真紀の心にはその存在はあまりに鮮烈すぎた。

その記憶がきっかけで、彼女はこの高校の本来の姿である「進学校」の肩書きを欲するでなく、むしろ合唱部の一員としての名を欲するようになった。だからそれ以外のことは何をするにも不本意極まりなかった。

クラスの親睦を深めるための合宿も仕方なく参加したようなものだし、六五分と他の高校に比べ長い、そんな授業も仕方なくこなして。音楽の授業は三歳頃にレッスンで教わった基礎中の基礎的なものばかりで、退屈極まりない。他の生徒が「帰れソレントへ」のイタリア語に苦戦しているのを見て、そういえば小学三年の頃には暗譜で歌えていたっけ、などと実に迷惑で冷めたことを考える。

彼女にとっては、この学校におけるほぼ全ての出来事に「仕方なく」という言葉がついてまわっていた。

そんな風に自暴自棄になっていたため、元来社交的な性格であったはずの真紀がクラスで心を閉ざすのに時間はそれほど必要でなかった。それどころか孤立の度合いは増していくばかりである。入学して三週間。まだそれだけの時間しか経っていないというのに。

授業で当てられてさらりと正解を述べてやると、周囲の視線が一斉に真紀に注がれる。「あの林が喋ったよ」とでもいうように。

例の音楽の授業で「帰れソレントへ」を流暢な発音で、そして完璧に徹した歌声で歌い上げたときもそうだ。殆どの生徒が最近の歌手やアーティストのような一癖ある歌い方をする中、彼女の歌は素晴らしくもあったが、それと同時に間違いなくクラスでは浮いたものになって、陰口や妬みの格好のネタにされたものだった。

彼女の声はそれほどまでに一年三組では珍しい、いや珍妙極まりないものとまでされていた。折角の綺麗な声が勿体無いのだが、その声が珍しいものにならない場所は、この学校でも限られた場所しかない。

そこは、音楽室、図書室。

「真紀ちゃんこれから部活？」
「あ、うん」
本の返却手続きをしていると、図書委員の女子生徒に声をかけられる。中学時代からの同級生、坂本志織だ。もしも真紀とクラスが一緒だったのならばこの状況は変わっていたのかもしれないが、残念ながら志織は真紀の隣のクラス、四組である。
「志織は今日もここ？」
「うん、佳代ちゃんも今日当番だからさ。佳代ちゃん掃除当番だからまだだってー」
どこか間延びした口調だが、相手は真紀である。元来人当たりは良いが、現在の状況が状況ということで、殆ど冷たい口調を崩さない真紀。ある意味ではちょうどいいバランスが保たれているのかもしれない。
「じゃ、真紀ちゃんがんばってねー」
「うん、志織もね」
重たいガラス戸を開け、生徒玄関の前を通り、特別教室棟へ向かう。音楽室は特別教室棟の一階にある。
近頃の真紀は、特に音楽室に入り浸ることが多い。
顧問の坂崎亜矢の指先が振り上げられ、拍をとる。冷めた真紀に魂の宿る瞬間。そう、真紀は一年三組唯一の合唱部員。
とは言ってもこの合唱部、真紀を入れて九人しかいない。合唱という形式をとるにはあまりにも苦しすぎるメンバー数で、毎年部の相続が危ぶまれたり、予算交渉で圧倒的不利に立たされそうなものである。
しかし、コンクールなどあればそれなりの成績を納め、福祉施設の慰安コンサートや市民文化祭にも引っ張りだこなものだから、まず廃部になることはない。それどころか予算交渉ではこちらのほうが有利になるほどである。
この学校の名誉の一端を担っているのは間違いなくこの合唱部なのだから、それを自ら潰してしまうのは学校側としても不利益なの

だ。
部長の菊池茜は、いつかの練習前にそう現状を皮肉っていたものだった。

練習開始十分前、ちょうどいい頃合いに音楽室に着いた。今練習しているのは、八月に行われるコンクールの課題曲、自由曲、そして七月に行われる文化祭での演目である。
さすがにもうこの時間ならば、部員の三人程は最低でもいるだろう。真紀はいつものようにドアを開けようとするが、その手は引き戸にかかったまま止まった。

「君、合唱部の子だよね。確か…林真紀さん」

突然後ろから呼び止められた。カンタービレ。真紀の頭に一番最初に思い浮かんだ単語はこれだ。曲想を示す音楽標語であり、「歌うような」という意味を持つ。そう、今の声の主は「歌うような」話し方をしていた。
「…そうですけど」
いつものように冷淡な響きを含む声で、いつものように別に興味ないとでも言うように振り向くと、自分より年下とも思えそうな華奢で繊細な少年がそこにいた。
いや。年下なはずはない。
ここは普通の県立高校で（確かに文化部の活動はレベルが高いし、学問でも県内有数の実力はあるが、結局ごくごく普通の県立高校なのである）、中等部などはないし、まして中高一貫教育でもない。それに彼の学ランのボタンに彫られているのは間違いなくこの学校の校章であり、学年章はローマ数字のⅠだった。真紀と同学年なのである。
突然初対面の、それも扱いの苦手な男子生徒に声をかけられ、つい訝しげな瞳をしてしまう真紀。それに気付いたのか、彼はやはり

流れるような歌うような、そんな美しいテノールで名乗りをあげた。
「そっか、今日初めて会うんだったっけ。僕は七組の滝島英敏」
彼とは初対面ではあるが、真紀もその噂だけは聞いたことがある。確か両親ともに地元の合唱団でソリストを任せられるほどの実力を持ち、自らもその合唱団に歌い手兼伴奏者として参加しているとか。
更に、伴奏だけでなくピアノソロまでソツなくこなしてしまう、いわば純粋培養音楽少年らしい。どことなく、自分に似ている。そんな気がした。自分が物心ついた頃には声楽のレッスンを受けていたように、彼も恐らくそうだったのだろう。
「七組ってことは、人文科…」
「そ。あ、坂崎先生、今日はこっち大丈夫です」
英敏がいきなり坂崎の名を出し、驚いて彼と同じほうに視線を向ける。それまで気配がなかったということはたった今職員室から来たのだろう、三十歳ほどの落ち着いた身なりの女性…坂崎亜矢が楽譜を片手に歩いてきていた。
「あら、英敏今日は生徒会いいの？真紀も立ち話してないで入ればいいのに」
まだ英敏に聞きたいことはあったが、結局坂崎に遮られてしまう。消化不良のまま、真紀は坂崎と英敏の後ろについて音楽室へ入った。

合唱部といってもある種では体育会系なもので、練習は筋力トレーニング、ストレッチ体操などから始まる。しかしスカートでストレッチ体操というのはなかなか恥ずかしいものがある。まして今日は、いつもはいないはずの男子生徒がいるのだから。
「でも先生、どうして私だけ滝島君に会わなかったんですか？」
「だって真紀、いつもさっさと帰るでしょ？あのバスが最終ってわけじゃないんだからもう少し残ればいいのに」
真紀の背中を押し、ストレッチのアシストをしながら坂崎は言う。真紀は体が硬い。なかなか指先がつま先につかず、足が痛くなってくる。

確かに真紀がいつも帰るバスは最終バスではない。けれども残ってまで部員達と馴れ合う必要はない。そう判断したから、彼女はいつも先に帰っている。
体をほぐし、全員がピアノの周りに集まったところで発声練習をする。それが終わるとようやく曲そのものの練習だ。
「じゃ、課題曲からね」
「はい」
コンクールの県予選と文化祭の時期が近い事もあり、課題曲は文化祭の舞台でも歌うことになっている。県予選に向けての進捗度を生徒達に披露するため、また舞台でコンクール曲を歌うことに少しでも慣れるためだ。場数を踏んでおくとよりプレッシャーは少ないものである。
課題曲はアカペラのミサ曲で、個々の技術だけでなく何よりも各パート、ひいては歌う者同士全員の調和が重要となる。その楽譜はよく見られるものとは少し変わった形状で、普通の五線譜に書かれている縦線がない。複雑にそれぞれのパートが絡み合い、それで音楽が出来上がっていくことを示すように。
「うーん、真紀。そこすごく巧く歌ってくれてるんだけど、ちょっと浮きすぎかな。全部のパートが絡むいいトコだから」
「はい」
……おかしい。いつもは巧く周りと合わせられるはずなのに。露骨にその不快感が表情に出たらしく、眉間に皺が寄ってしまう。
「どうしたー？真紀らしくないよ」
茜にまでそう言われてしまった。茜は真紀が入部したときから彼女をよく見ている。音楽に関しては勿論、時々教室移動などですれ違う彼女の姿までもを。だから茜は彼女の置かれている状況を知っていたし、合唱部にいるときとの様子の違いも把握していた。
「英敏が来てるからとかじゃないよねー」
同じ学年の部員である矢田鮎美に至ってはこんなありもしないことを言う。なにせ真紀と英敏は初対面なのだ。あの状況で恋愛感情

が突然芽生えるなど有り得ない。ごくごく普通の初対面の挨拶を交わしただけだというのに。運命など信じない、そんな真紀には尚更のこと。

「そんなの関係ない」

強く否定してはみたのだが、いまいちしっくりこないのは図星だからか。否、強く否定した時点で図星だったのかもしれない。

「そうだね、じゃ、休憩にしよう」

活動時間の真ん中の辺りで、坂崎の声が休憩を告げる。ピアノの周りに集まっていた部員は購買に行ったり雑談をしたりと散り散りになり、ピアノのそばに残ったのは真紀と英敏だけになった。

「林さん」

「真紀でいい、面倒だから」

言ってしまってからはっとしたが、もう遅い。合唱部員はともかく、初対面の相手にこんなことを言うなど、今の真紀では到底考えられない事だったのに。

クラスでごくごく稀に名前が呼ばれるときも「林さん」なのだが、決して「呼び捨てでいい」などとは言わない。そんなことを言おうものなら、たとえ真夏でもクラス中が「明日は雨だ、いや雪だ」などと騒ぐであろう。

「いいの？じゃあ、真紀これ歌える？」

真紀の返事も待たずに彼はピアノを弾き始めた…が、彼の伴奏はもはや伴奏の域を超えていた。

ピアノの音色自体が声となっているような感覚を覚え、歌い手の声に寄り添い、ともに歌っているような錯覚を与えてくれるのだ。

歌いだしの伴奏の動きで、どの曲なのか真紀にはすぐにわかった。

「調は違うけど、歌える」

頷くと、英敏の伴奏に合わせてそっと歌いだす。

彼女達の歌ったのは、ラフマニノフのヴォカリーズ。歌詞のない声楽曲の中でも名の知れたものである。真紀が中学時代に全国でト

ップの評価を得たのはこの曲。そのときはレッスンをつけてくれている先生の伴奏で歌ったのだが、今ほどの充足感、自分の声と伴奏の絡み、馴染み具合はこれまでに覚えたことがなかった。
歌い終わると、部員どころか坂崎までもが呆然。
「言うことナシ。あなたたちそれ文化祭でそれやってみたら？」
坂崎がそう言い出すと、周りも頷いてみせる。初対面とは思えない、もう十数年以上も英敏が真紀に伴奏をつけてくれていたような見事な調和。耳の肥えた部員や坂崎を唸らせるには充分すぎるほどだった。
「でも、まだ私達」
「初対面？関係ない関係ない。フィーリングって大事よ」
「ああもう、だから私は…」
面倒なことに巻き込まれたくない。その一心で真紀が反論しようとしたときだった。
「確かに初対面だから、真紀はまだ英敏のこと何も知らないでしょ。でもさ、まだ何も知らない段階でそんなに英敏を嫌わなくてもいいんじゃない？」
茜の一言はひどく的確だった。
こうなると真紀も何も言えなくなる。本当であればあまり関わり合いになりたくないのだが、これ以上拒否して英敏を傷付けるのも後味が悪いものがある。すっかり荒みきったようだが、その心のどこかにはやはりまだ良心というものが残っていたようだ。
結果、文化祭のプログラムには、急遽「ラフマニノフ作曲　ヴォカリーズ　Ｖｏ．林真紀　ｐｆ．滝島英敏」が追加になってしまった。それも、ほとんど真紀の意思とは関係なしに、である。

Suite. 2

ヴォカリーズ事件（勝手に命名したのは真紀だ）以来、真紀と英敏は昼休みになると、練習のため否応なく行動を共にすることになってしまった。

他人と関わるのが面倒だと思う真紀だ、本当なら伴奏をつけずとも一人で歌いたいところである。しかし、彼女も英敏も音楽に関しては妙に完璧主義なところが災いして、結果昼休みになる度に音楽室に向かうことになってしまう。

それに、単純に音楽を極めたいだけではない。真紀自身も信じられなかった、そして知りたかったことがあった。

それはあの伴奏と自分の声の馴染み方だ。本当にあれは「二人の音楽の才能」で片付けられてしまう類のものなのか。彼女はそれを知りたいがために、嫌々ながらではあるが練習のために毎日音楽室に通っていた。

しかし二人の練習のことはクラス、いや学年中での噂になり、やがては「音楽室での密会」だのと余計な尾鰭背鰭がついて広まっていた。昼休みに楽譜を持って音楽室に向かおうものなら、同学年の生徒がわざわざ指差してニヤニヤしてくれる。

……うざいんだけど。

真紀は非常にイライラしていたが、あえてそれを表面に出すことはなく、何も見なかった振りをしてその生徒たちとすれ違っていった。もはや彼女は、その傷ついた心を冷たい棘で覆って守ることがすっかり上手くなっていた。

同学年でこの事情に理解を示してくれているのは今のところ三人。同じ合唱部員の鮎美と渋谷里香、図書委員の志織ぐらいのもの。同学年でマトモに会話ができるのはこの限られたメンツだけ。

「そんな奴ら気にしたほうが負けだよ」

鮎美たちはそう言ってくれるし、自分でもそう思う。

そういう風に自分達を嘲笑う奴らは、他人を見下す事で楽しみを得るしかない、可哀想で頭の弱い人間だと思う。しかし、それ以上に不愉快だった。

なぜ自分にその気がないのにそのように勝手に話を広げられるのか。そもそも何故英敏なのか。真紀には何よりもそれが我慢ならなかった。英敏のことは嫌いではない。しかし、理由はわからないのだが、一緒に居るのはなんだか気が引けるのだ。

英敏はいつも真紀より先に音楽室にいる。というのは、真紀が音楽室に行くのを半ば渋っているからなのだが。

今日も特別教室棟へ向かう渡り廊下では、彼の演奏するショパンのノクターン第二十番嬰ハ短調が音楽室から漏れ聞こえていた。彼がサマーコンサートで、友情出演として演奏する曲だ。

初めてソロ演奏を聞いたときも思ったのだが、英敏の演奏するピアノの音色は力強く優美であり、それでいてほんの少しの物悲しさを含んでもいた。

きっと演奏している曲があまりにも哀しすぎるからだ。真紀はそう思い込むことにしていた。余計なことを考えると歌声に影響が出る。それを先日改めて、身をもって実感したから。

「さっそくやろうか」

何事もなかったかのように、英敏がヴォカリーズの伴奏譜を取り出し、そして真紀も歌い出す。彼女の滅茶苦茶な心情とは裏腹に、その演奏は息がピッタリだから困ったものである。

「滝島君、そこのｍｆさ、ｆくらいにしてみようか？」

「真紀、今のトリルもう少し細かいといいんじゃないかな。今のだと三二分音符くらいにしかならないからさ」

お互い音楽には妥協を許さない。どうせ演るならば、技巧的なものを、美しいものを、心に響くものを。そのような感じでお互い遠慮なく意見を言い合う。もっともそれが、周りからすればお二人様モードに見えてしまうらしい。迷惑な話である。

二人とも、今日は練習を早めに切り上げて、少し話をすることにした。何せ英敏はまだ昼食をとっていなかったのだから。購買部で買ってきたカツサンドとコーヒー牛乳が机の上に置かれていた。授業が終わったあとに購買に駆け込み、その足でここに向かってきたのだろう。

「あの、私とのことで変な噂立ってるんだけど」

婉曲的な表現が嫌いなので、真紀は単刀直入に聞いてみる。けれど英敏の答えは、それ以上にあっさりしたものだった。

「知ってる。けど僕は気にしてないよ」

「じゃあこのままでいいって訳？」

「別にいいんじゃない？言いたい奴には言わせておけばいい」

……何でよ。そんなの納得いかない。

真紀の中の張り詰めていた何かがぷつんと切れた。入学して一ヶ月、もうこの学校の全てに嫌気が差してきていた。この練習はおろか、学校に来ることさえも。ずっとそれをひた隠しにしてきたのに、限界は思わぬ理由から思わぬときにやって来てしまったのだ。

「…私の気持ちはどうなるの？」

「え？」

何故こいつは分からないんだ。腹が立つ。それ以上の思考など不要だった。限界を破った真紀の脳にはブレーキなどついていない。アクセル全開で思っていたことをズバズバと遠慮なく吐き出していく。

「陰でコソコソ笑われる私の身にもなってみてよ！何で私があなたのせいで笑いのネタにされなきゃいけないの？　こんな学校だって来たくもなかったし、この練習だって好きでやってるんじゃないんだから！」

ここまで一気に言ってから、しまった、と思った。急激に脳内に色彩が、思考が戻ってくる。音楽をやる上では、伴奏をしてもらう上では絶対に言ってはならない一言だった。

何よりふと見えた英敏の瞳があまりに哀しそうで、それ以上言葉

を発する事ができなくなってしまったのだ。
「真紀も僕をそういう目で見るんだ？」
絞り出すような声で言うと、英敏は更に、「あまり言いたくないけど」と前置きしてから言葉を繋げた。
幼い頃から音楽の才能を妬まれ、真紀とさほど変わらない身長と華奢な外見というだけで笑われ続けていたこと。
中学では更に過酷ないじめ、肉体的にも精神的にも暴力を受け、一時は精神を病みかけて、都会の中学からここに逃げるように帰ってきたこと。
そして環境の変わった今でも、時々は心ない人に中傷を受けたりすること。
「中学一年の終わり、だね。転校っていう手段を使って僕は他人の目から逃げた。でも、もうそれ以上逃げるのは嫌なんだ。僕を笑うのなら笑えばいい。僕は僕でいい、って教えてくれた人がいるから」
「教えてくれた人……？」
気まずくて目を伏せていた真紀だが、思わず顔を上げる。
「知らない？坂崎先生だよ」
そう言って笑ってみせる英敏の瞳には、もはや先ほどの翳りなどなかった。いつもと同じ、少し色素の薄い透明な瞳。優しい色をしているくせに、いつもピアノに向かうときのような真剣な色の瞳だった。
「いじめる方はストレス発散になったりするし、何より話のネタが作れるしいいことづくめなんだろうね。けどいじめられた方の傷は深い。もう逃げたくないって気持ちはあったけど、僕もやっぱり怖かったんだ。中学の頃と同じようになったら……って」
「……」
「けどね、それを全部坂崎先生に話してみたんだ。先生は全部分かってくれた。『英敏には誰にも負けないものが、音楽があるんだから、それを妬まれても誇りに思いなさい』って」
「私にはそんなものないよ。誇りに思えるものなんて」

英敏の隣の席、机に肘をついた真紀が、そう呟く。意識せずとも涙声になってしまっていた。しかし涙は流さない。人前で泣くなど情けないことはしたくなかった。

「あるよ。真紀にも」

話はまだ終わっていないのに、突然英敏は立ち上がり、再びピアノに向かった。昼休みもそれほど時間は残っていない。しかしそれに反比例するかのように、彼の昼食はまだ半分近くも残っていた。

「え、滝島君」

「おいで、真紀」

あんなに酷いことを言ったのに、英敏は真紀に向かって心からの微笑みをくれる。この人はどこまで優しいんだろう。気づいたら真紀はその優しさという糸で手繰り寄せられるように、ふらりと立ち上がり英敏の右隣に陣取った。

「もう一回歌っても少し時間はあるから、それから続き話すよ」

いつものように、鍵盤に英敏の指が置かれる。最初の和音が耳に入ると、真紀はもはやパブロフの犬だ。ほぼ条件反射のようなもので、なおかつしっかりと歌い上げていく。相変わらず、「完璧な」音楽だった。

「これでわかったよね？真紀の誰にも負けないもの」

鍵盤から指先を、ペダルから足を離し、英敏が微笑んだ。

「もしかして……歌？」

「そう。真紀の話はだいたい坂崎先生から聞いてたんだ。真紀はいつも僕がここに来る頃には帰っちゃってたからわからないかもしれないけど」

「じゃあ、私が私立の試験落ちた事も」

「うん、全部聞いたよ。初めて真紀と会った日に、だけどね」

聞かれてしまった。あんな情けない自分のことを、よりによって一番聞かれたくない英敏に聞かれてしまった。目の奥がつんとして

きて、あ、涙が出そうだ、と思うが必死で堪えた。人前でだけは泣くものか。妙に高い真紀のプライドが彼女をそうさせた。

……この人にだけは涙を見せるものか。

「え、どうしてその日」

「真紀の歌声が、綺麗なのになんだかすごく冷たくて、悲しそうだったから」

思えば、こんなことを言われるのは初めてではなかった。レッスンでも部活でも、自分の歌声を「冷たい」だの形容する人間は誰も居なかった。しかし全国レベルのコンクールなどになると、審査員のうち必ず誰か一人がそんな評価を下していたものだった。

「非常に技巧的であるが、その歌声に『感情』が感じられない。あくまでも冷徹に淡々と楽譜をなぞる事で『感情を表現するフリをしている』のみで、自らの感情をありのままに表現する能力には欠ける」

ヴォカリーズで全国トップに君臨したときの評価にひとつ、こんなものがあったことを思い出す。

「冷たい……悲しそう？」

「うん。こう見えて十五年、いや、母さんの腹の中にいるときから他人の歌声聞いてきたからなんとなくわかるんだ。それで、先生に聞いてみた」

「そうだったんだ……聞かれちゃったんだ、私の人生の汚点みたいなものなのに」

「汚点？それを汚点だって言うなら僕の人生こそ汚点だらけだよ。今でも時々思うんだけど、もしかしたら僕は生まれてきた事自体が間違ってたかもしれないね」

恐ろしいことをあっさり言ってのける。真紀の言葉で言うところの「人生の汚点」も、彼はその微笑みと、残酷な言葉で全て受け止めてしまったのだ。自分の「汚点」は勿論のこと、真紀の「汚点」

でさえも。
　そんな、生まれてきた事自体が間違ってるなんておかしい！…そう言おうと思ったが、英敏はそんなことなど聞き飽きたとでも言うように首を振り、真紀に何も言わせようとしない。その代わりに、真紀にこんな言葉をかけてやる。
「そういえば先生、こうも言ってたよ。音楽は心で奏でるもの。誰かと一緒に演るなら尚更、って」
「……誰かと一緒に演るなら尚更」
　英敏の言葉を反芻する。
「そ。楽器とか喉は演奏者の心の声を代弁するもので、実際の音楽っていうのは、本当は心で演奏されてるんだ。だから、こんなこと言っちゃ失礼かもしれないけど、演奏が下手な人だって誰かを感動させられる、音に乗せて自分の心の声を聞いてもらえる……」
　英敏の言葉は予鈴に遮られた。
「そういうことだから、また明日ね」
　英敏は食べかけのパンの袋に素早く輪ゴムをかけ、少しだけ残っていたコーヒー牛乳を一気に飲み干した。牛乳パックはビニール袋に入れてそのままゴミ箱行きだ。
「あ、あの、滝島君……」
「なに？」
　振り向いたその笑顔があまりに綺麗で。
「その……残ったカツサンド、どうするの」
　違う事を言おうと思ったのに、もっと大事な事を言おうと思ったのに、その唇からは見当はずれな言葉しか出てこなかった。
「どうせ次の授業何しても文句言われないから、その時食べるよ」
　ひらりと身を翻し、英敏は先に階段を上っていく。
「……ありがとう」
　パタパタと遠ざかる足音の主に向かって、ぽつりと真紀は一番言いたかった言葉を述べた。同時に、なぜ本人に直接言えなかったのかと自分を責めた。

なぜなのか。そんなものは簡単だ。真紀自身が、プライドという高く厚い壁で自分を守ってしまっているから。その壁で他人を撥ねつけていたから。「仕方なく」を言い訳に、嫌な事全ての責任を他人になすりつけていたから。

突然、涙が楽譜を入れたファイルにぽたぽた落ちていく。頬を伝う生暖かい雫がだんだん冷たくなっていって、生乾きになったかと思えばまた温い雫が頬を伝って冷たい跡を残す。不快極まりない感触なのに、なぜこうも満たされた気持ちになっているのだろう。

「林さん……その、どうしたの？」

ふと顔を上げると、同じクラスの新藤咲子という生徒がいた。クラス委員長ということもあり、最初の頃はよく話しかけてきてくれていたのだが、最近では殆ど口をきいていなかった。真紀が心を閉ざし、咲子の優しさを拒んだから。咲子自身もそれ以来なんとなく声をかけづらかったのだが、真紀が泣いているのを見て、どうしても黙っていられなくなってしまったのだ。

「またクラスで何か言われたの？」

咲子は真紀の立場をよく知っていた。例のギャル集団に疎まれ蔑まされているのを何度も見たことがあるし、自分もクラス委員と風紀委員を兼任するという生真面目さゆえ、似たような立場にある。

「違う……ごめんなさい、あの、新藤さん」

「咲子でいいって。ねえ、保健室行く？先生にはあたしから言っておくよ？」

「あ……」

すごく情けなくて、他人を心配させるような表情だというのは自分でも分かっている。こんな顔で授業になど出られない。さっきの英敏の言葉じゃないが、次の授業は比較的緩めのものだったから、一度ぐらいこういう理由で休んでも大丈夫だろう。実際あの柄の悪い生徒は時々学校を出て遊び歩いているようだし。

「うん、ごめんなさい」

「謝らなくていいって。堀田先生に愚痴ってきな。真紀の笑ってる

顔、一回はちゃんと見たいし」
「え？」
「ほら、もう時間だからさ！」
咲子の言葉に驚く間も無く、真紀の肩に咲子の手がぽんと置かれたが、彼女はそれを嫌だとは思わなかった。以前なら躊躇なくその手を撥ねつけていただろうはずなのに。
「ありがと、咲子」
ぎゅっとファイルを抱きしめるようにして歩く。しかしその足取りは決して重くはなくむしろしっかりとしていて、後ろから見送る咲子を安心させたものだった。

「良かったじゃなーい。皆心配してたのよ」
保健室で事の顛末を話すと、養護教諭の堀田未月はそう笑ったものだった。時々教室にいるのが嫌になったとき、真紀は保健室に足を向け、このように話を聞いてもらうことがあった。
「皆、って」
「合唱部の皆もだし、さっき話に出てきた新藤さん。林さんの事よく相談しに来てて」
「……え？」
耳を疑った。誰も自分のことなんかそこまで気にかけていないと思っていたのに。所詮「他人」でしかないはずの自分をこんなに大切にしてくれている人が、たくさんいたなんて。
「林さん、『誰も自分みたいに場違いな人間のことなんて考えてない』なんて思ってたでしょう？そんなことないのよ。皆ね、林さんがどうすれば心を開いてくれるかすごく必死だったんだから」
「でも……」
また涙腺が緩みだした。人前でだけは泣きたくないと思っていたのに、今日に限ってどうしてこんなに涙が出てくるのか。不思議でならなかった。
「ごめんなさい、先生」

「謝らなくていいの。たまには泣きなさい。そうやって自分の気持ち出せる場所作っておいたほうがいいんだから、ね」
どうして意地を張ってばかりだったのだろう、どうして気づけなかったのだろう、気づこうとしなかったのだろう。周りはこれほどまでに真紀を思ってくれていたというのに、自分は何一つできていないではないか。逆にそれを拒むような真似をして。
このままでは嫌だ。もう恩を仇で返すような真似はしたくはない。ハンカチに顔を埋めながらそう決意する。

泣き疲れたため、いつの間にか眠っていたのだろう。チャイムが授業の終わりを告げるのに合わせ、真紀は突っ伏していた机から顔を上げた。まだ人に見せるには躊躇われるような顔ではあるが、冷たい水で顔を洗い目を冷やしたので、先ほどよりは幾らかマシになったものだ。
「さ、気分一新！行っておいで！」
ポンと堀田に背中を押されると、冷たく心を閉ざした林真紀はそこから姿を消した。
「林さん、もう大丈夫？」
咲子が迎えに来たらしい。
「うん、大丈夫！」
真紀の笑顔は、涙を流した後だったということもあり、少々痛々しくはあったが、それでも咲子と堀田を安心させるには十分すぎるものだった。何より、その笑顔はあまりにも愛らしかった。もともとの顔立ちが愛らしく誰にでも（例の素行の悪い集団は別として）好かれそうなものだったのに、真紀は自分でそれを隠してしまっていたのだ。誰も気づく事がなかった真紀の笑顔の可愛らしさに、これから何人が気づくのだろうか。

Suite. 3

ここ二週間ほどの一年三組教室は、それまでと僅かに様子を変えていた。教室の隅の至る所に蛍光塗料や黒いペンキ、そして山積みの段ボールが置かれている。

この日の放課後、真紀は珍しくクラスに顔を出していた。

英敏とあの会話をしたのが五月の始めだから、それから二ヶ月が経ったわけである。今月下旬、夏休み直前にはこの高校の一大イベントである文化祭が行われる。市内、いや県内でもこの高校の文化祭はレベルが高く、時には県知事がお忍びで顔を出すほどである。

各クラスごとの展示や食堂などもそうなのだが、ここではやはり文化部の活躍が大きなウェイトを占める。軽音楽部のライブとなると女子生徒たちの黄色い歓声が飛び交うし、全国レベルの演劇部の発表はこの文化祭の目玉になっている。吹奏楽部も毎年中庭で演奏会を行い、真紀の所属する合唱部のサマーコンサート、通称サマコンも目玉の一つとなっている。

しかし、合唱部のほうだけでなくクラス展示の準備もおろそかにできない。もちろん合唱部にも顔は出すのだが、それは夕方の五時を回ってからになりそうだ。

英敏や堀田、咲子たちとのあの会話以来、真紀の中で確実に何かが変わった。真紀自身でもその変化がわかるほどに。 その証拠として、一年三組では確実に彼女の居場所ができつつあった。最初は真紀の変化に誰もが戸惑ったようだが、少しずつクラスメイトがそれを受け入れてくれたのである。

やはり真紀が孤立していたのは自らそのような道を選んだからで、取っ掛かりがあれば真紀と親しくなりたい、そう思っていた生徒は少なからずいたようだった。

「あ、はーい」

「近くのお店から段ボールもらってこなきゃいけないんだけど、真

紀も行くよね？」
「うん、行く。ついでにみんなに飴でも買って来ようよ」
　このようにクラスメイトと会話をするようになるなど、二ヶ月前の冷めきった自分からは想像もつかなかった。当時は自分に近づくもの全てが疎ましく思えたものだが、今では自然に他人を受け止められるようになっている。英敏のあの言葉はそれほどまでに彼女の心に響いたのである。

　高校から歩いて五分もしないところにスーパーマーケットがあり、そこで段ボールを譲ってもらうことにする。昔からこの高校の生徒が学校帰りや休日の昼に立ち寄ることが多いので、その代わりというわけではないが、文化祭となると毎年大量の段ボールを提供してくれるのだ。
　それから真紀と咲子のポケットマネーで苺ミルクのキャンディーを買う。教室で作業をしている他の生徒への差し入れである。
「真紀ってさー、最初すごいおとなしいと思ってたけど喋ってみたら全然違うんだもん」
「よく言われるんだよねーそれ。そろそろ地が出てきたんだよ」
　白いブラウスに紺のリボン、そして紺のスカート。相変わらず地味な制服のリボンを夏の熱風にそよがせ、真紀と咲子は学校までの短い距離を話しながら歩く。段ボール自体は重いが、二人で運んでいるのでいくらかは楽なものである。
「それに歌も上手いんでしょ？」
「上手いだなんてそんなー」
「でもさ、コンクールで日本一になったし、サマコンでソロやるって話も聞いたよー」
　え。真紀は一瞬固まってしまう。プログラムの詳細はまだ公開していないはずだし、真紀からも詳しい事は話したことはない。彼女は一体どこからそんな情報を持ってきたのだろうか。
「それ、どこから聞いたの？」

「どこからとかはないな。有名だよー。滝島英敏との名コンビ。いつも昼休み音楽室行くのってそれだったんでしょ？」
「あー…」
やはり、まだ真紀と英敏の妙な噂は残っているようだった。クラスで孤立していた真紀と、元々いじめられっ子であった英敏。心無い人間の格好の餌食になりそうな要素ではある。そういえばまだ時々、クラスのギャル系集団や少しいきがっているような男子生徒たちが真紀と英敏に関してありえないような噂を立てているのを聞いたことがある。いや、聞こえるのだ。相手がわざと本人に聞こえるように言っているのだから。しかし真紀は、それを相手にするまでもないほどの精神力も仲間も得ていた。英敏じゃないが、言いたいならば勝手に言わせておけばいいのだ。
「なんか変な噂立ってるみたいだけどさ、気にしないで。あたしはそんな噂信じてないからさ」
トンと自分の胸を叩いて、咲子が言った。同い年ではあるが、真紀にとって咲子は姉のような存在だ。自分よりしっかりしていて頼りがいがある。そういえば、誰もがやりたがらなかった、いわゆる嫌われ者的立場の風紀委員に自ら名乗り出たのも咲子だった。
「それに真紀と滝島君ならいい演奏できると思うよ」
……滝島君の言うとおりだったよ。
咲子と二人でなんとなく笑うと、真紀は同じ制服の生徒とすれ違いながら夏の道路を歩く。『一人じゃない、っていうのも悪くないね』と、今頃生徒会の仕事に追われているであろう英敏に向けて呟いた。

そのあと真紀は、クラスの展示の準備作業――一年三組ではプラネタリウムを作る事になっている――の方を抜けさせてもらい、音楽室に向かった。茜には五時までに音楽室に行くとメールで伝えているのだが、今は五時十分。どうみても遅刻だ。もっとも、おおらかな合唱部メンバーの事だ、あまりうるさくは言われたりしないと

は思うのだが。
急がなきゃ。そう思って音楽室のドアを勢いよく開けていざ突入…しようと思ったが、いつもの歌声が聞こえない。あれ？と思っていたら引き戸のレールに躓いていて、その結果真紀は派手に転んでしまうことになる。
「ちょ！真紀あんたどうしちゃったのー！」
茜は即座に真紀の元に駆けつけて、怪我をしていないか確認する。少し膝をカーペットで擦りむいてヒリヒリするのだが、他のところはいたって平気だ。
「ごめーん……でも茜ちゃん、なんで今日歌ってないの？」
先輩に向かって、しかも部長に向かってタメ口をきくとは何事だと思われそうではあるのだが、実はこれが逆にこの部のルールだったりする。
先輩も後輩も関係なく、友達のように接する。そうすることによって音楽面でも結束が強まり、こうしたほうがいい、ああしたほうがいい、そのように互いに意見を言い合い、より美しい音楽を奏でようというのが狙いなのである。
「今日サマコンの衣装決めようと思ってて、その話してたんだ」
「え、まだ決まってなかったんだ？」
サマーコンサートは例年であれば制服で行っていたのだが、それでは吹奏楽部や軽音楽部に見劣りする。あの地味な制服なら尚更のことだ。
これは以前から言われていたことで、部活が終わったあとなどに茜たちも話し合ったらしいのだが、なかなか結論には至っていないそうだ。吹奏楽部は全員でオリジナルのポロシャツを着て演奏し、軽音楽部はバンドの音楽性によって実に様々だ。Tシャツにジーンズというラフなものから鎖やレザーなどでゴテゴテに飾りつけたものまで。
「そうなんだよー。それに私と茜だけで決めてもね」
坂崎が大きめの絆創膏を持ってきて、真紀の膝に貼る。すりむい

た範囲は意外に広く、普通の絆創膏では足りなかったらしい。恥ずかしい事をしてしまったものだ。

今のところ部員達の間で候補にあがっているのは三つ。各自で浴衣を用意する、音楽部仕様のお揃いのTシャツ、ミサ曲を歌うということでシスターの衣装。しかしTシャツはどこの部活でもやっているし、シスターの衣装は夏に着るのは暑さと重さで大変なので、ほぼ浴衣で確定しそうになっている、とのことであった。

「浴衣いいと思うけど…もしかして友情演奏とか伴奏の人とかも着るの？」

「あ、着る着る」

不覚だった。グランドピアノの椅子には英敏の姿があった。転んだ一部始終をしっかり見られてしまったというわけだ。あまりに派手に転んだものだから、下着が見えてはいないだろうかと真紀は一人顔を赤らめた。

もちろん、英敏も学生服から真っ白で糊のきいたシャツと学生服の黒いスラックス、すなわち夏服になっていた。半袖の白いシャツからしなやかに伸びる腕は細く華奢で、彼のダイナミックなピアノの音色にはどこかそぐわないものがある。

「って滝島君いたの？」

「いれば悪い？」

「いや、悪かないけどさぁ…」

ブツブツ言いながら真紀もグランドピアノの方へ足を進めた。

「じゃあ浴衣でいいかなー」

坂崎ももちろん浴衣を着るという。坂崎は大和撫子という言葉がよく似合う、とても32歳とは思えないほどの若さと美貌を誇っている。浴衣は間違いなく似合うはずだ。

しかしその実「姐さん」などと生徒に呼ばれる面倒見のよさ。そのギャップが真紀は好きだったし、他の生徒も坂崎を慕っている。

そういえば真紀は、最初は坂崎にしか心を開いていなかった気が

する。それなのに、今では…。
「……」
「真紀、どうしたの？」
「あ、ううん、なんでもない」
……うん、本当になんでもないんだ。私はただぼーっとしていただけ。滝島君の浴衣姿を想像していたなんて、死んでも言えない。
本当に死んでも言えないようなことを心の中でだけ言う。英敏とのあの一件以来、このように心の中で変な独り言を言うようになってしまった気がした。
「じゃあ、とりあえず喉あったためるために校歌歌おうか。英敏、伴奏よろしく」
「はい」
英敏の繊細な指先が鍵盤の上に置かれた。それがあまりに綺麗すぎて一瞬見とれた。そのせいで指揮を見逃し、上手く歌いだすことができない。
……私はどうかしている。
歌いながらも心はどこかに行ってしまったようで。果たしてこれが一体なんなのか、真紀にはわからなかった。

「お疲れ様でした！」
午後六時半に練習が終わり、部員達はそれぞれクラスの手伝いに行ったり、最終バスがある人は帰路についたりする。真紀は最終バスまでまだ時間があることもあり、もう少し音楽室に残ることにした。本来であれば茜たちと話がしたかったのだが、肝心の茜や坂崎は打ち合わせか何かでどこかに行ってしまったようで、音楽室に残ったのは真紀と英敏だけ。　なんだか、居づらかった。

Suite. 4

「滝島君。歌おうか」
妙な沈黙が嫌で、真紀はそう英敏に持ちかけた。
「え？あ、ああ……いいよ」
慌てたように返事をする英敏。ヴォカリーズの楽譜を取り出し、伴奏を始めようとしたのだが、最初の和音から既に間違っていた。英敏にしては珍しい。明日は雪でも降るのではなかろうか、というほどまでに。一方の真紀も声が思うように伸びず、今の演奏は決して出来がよくなかった。恐らく何度も歌った中で最悪の出来ではなかろうか。
「どうしたの？らしくないよ」
「真紀こそ」
演奏どころか会話までもがぎこちない。
「ごめん、私調子悪いのかな」
「真紀さ、なんか……悩んでる？」
今度は友情演奏で使う楽譜を開きながら、英敏が尋ねてきた。
「そんなことないよ」
否定はしたのだが、聡い英敏の事だ。真紀の動揺には気づいているはずである。
「そっか。ならいいけど、なんかそんな気がしたから」
やはり英敏は鋭い。言うと、そのまま流れるようにピアノを弾き始めた。ベートーヴェンのピアノソナタ『熱情』第一楽章である。最初はショパンのノクターン第二十番嬰ハ短調を演奏する予定だったのだが、なぜか最近になって急遽変更したのだという。もっとも、どちらの曲も以前からの彼のレパートリーであったから演奏に苦労は要しないのだが。
「気のせいだよ。滝島君こそ悩んでるんじゃない？」
「ん？僕は大丈夫だよ」

あっさりと否定する辺りが実に彼らしい。しかし、あの精彩を欠いた伴奏は普段の彼では決して有り得ない。彼の伴奏はいつも力強く主張し、それでいて上手く歌い手達を支えてくれる。しかし今日はその力強さが空回りした感があった。実際今弾いている『熱情』第一楽章もそうで、序盤の激しさが空回りしすぎて、譜面と微妙に違う和音になってしまっている。一体どうしたものか。

「滝島君、もう少し自分のこと大事にしてあげなよ。誰にでも優しいのはいいけど」

「あはは……大丈夫だよ」

『いつもの滝島英敏』を演じるために明るく笑ってはみせるが、これはいつもの彼の笑い方ではない。少し疲れたような、そんな声色を感じさせた。生徒会事務局の庶務活動にとどまらず、合唱部のサマーコンサートでの伴奏、自らのピアノソナタの演奏、更に一般のコーラスにも参加しているのだ、疲れがたまっても決しておかしくはなかった。

「……もう帰ろっか」

「え」

「それに滝島君、生徒会のほうが本業でしょう？みんなきっとまだ残ってるよ」

「真紀、僕……」

「何？」

振り向くと、英敏はどこか困ったような目で真紀を見ていた。あのとき、つらい過去を話してくれたときと同じような表情。自分の過ちを思い出し、真紀の胸が痛んだ。

……このまま帰ったら、滝島君が消えてしまうんじゃないか。

そんな錯覚を、いや錯覚というにはあまりに強すぎる喪失感を確かに覚えた真紀は、肩にかけた鞄を下ろし、英敏に駆け寄る。

「どうして私には何も言ってくれないの？」

もう、自分でも何を言ってるかわけがわからない。

英敏はいつも真紀の調子を狂わす。今日もまた、あのときのよう

に感情に任せてあらぬことを言ってしまいそうで怖い。しかし、あまりに無理している様子の英敏を見ていたらもう止められなくなった。

「滝島君っていつもそう。私には吐くだけ吐かせといて自分は何も言わない。確かに滝島君は私なんかより強いよ。けど強いのとなんでも一人で抱え込むのは違う」

「真紀……？」

「……ごめん、また余計なこと言った」

最近の真紀は、どうしても英敏のことになると暴走するらしい。

「そろそろ時間だから、私、帰るね」

本当はまだたっぷり時間があるのに、その場から逃げ出すために嘘をついた。音楽室から逃げ出したくて仕方なかったから。次のバス停まで疾走すれば幾分は頭を冷やせるだろう。英敏は彼女を追ってくる気配を見せなかったが、なんだかそれが少し寂しくもあった。

真紀はいつものローファーを履くと、ひたすら、泣きそうになりながら走った。少しでも気を緩めると、涙がどっと出てしまいそうだったから。どうしてこんなことをしてしまうんだろう。いつもいつも余計な事ばかりしてしまうんだろう。

本当はもっと考えてから行動したいのに、英敏の前ではそれができない。自分が自分でなくなるような恐ろしい感覚と同時に、なんとなく温かい感情も覚える。それは、真紀にはよくわからない感情だった。今まで生きていて、こんな不思議な感情を抱いた事なんてなかったから。

Suite. 5

次の日の昼休み。いつも通り、鮎美と里香、志織、更に咲子も加わった五人のメンバーが、一年三組の教室の窓際に陣取っていた。

「…ってわけなんだけど…」

昨日起こったことの一部始終を、いつものメンツに話そうとするが、彼女達は最後まで言わせてくれない。

「恋だねーこれ」

「うん、恋だよ」

「っていうか末期だよね」

「何で今まで気づかなかったの？」

異口同音にこれだ。まったく散々な言われようである。

「だって、私まだ…」

実は真紀は、それまでの人生で「恋」というものをしたことがなかった。別に男子生徒に嫌われていたわけではないし、むしろ好かれていた方なのだが、真紀の心のアンテナに引っかかるような人物がいなかったのだ。自分が同級生よりも大人だとは言わないし、自分でもまだまだ子供だと思うが、彼女にとって同級生の男子生徒たちはあまりに子供っぽく見えたから。

しかし英敏は別だった。確かにその華奢な外見は、中学生と見間違えられてもおかしくない。しかしその立ち居振る舞いは落ち着いていて、堂々としていて、繊細かと思えば思いのほか強靭な心を持っている。「未来の生徒会長」の呼び声が高いのも頷けるものである。真紀が今まで接した事がある男子学生たちとは明らかに趣を異にしているのだ。

「真紀ってば中学ん時からニブチンだったんだ。男子に呼び出され

ても『レッスンがあるからまたそのうち』とか言って流しちゃうんだもん」
　真紀の中学時代をよく知る志織はそう補足する。
「だから彼氏できないんだってば！」
「真紀ってば可愛いのにそういうところ勿体無いよねー」
　これは鮎美と咲子も口を揃えて言うのだが、真紀が明るくなってから明らかに男子生徒の一部が変わったとのことだった。もともと真紀は人懐っこそうな愛らしい顔つきであり、笑顔を見せると尚更それが引き立つ。芸術家らしく細やかな気配りができることもあり、男子生徒からは絶大な人気がある。

「だって、別に彼氏とか作らなくても…レッスンとかで満足にデートとかできないだろうし」
「あーほら話題すりかえた！で、結局英敏のことどう思ってんのさ」
　話題をすりかえたのは君らでしょう、と心の中でツッコミを入れながら、里香の問いに答えようとする、が、何故か上手いこと言葉にできない。しどろもどろな回答になってしまう。
「確かに滝島君は悪い人じゃないと思うよ。好きとか嫌いとかそういうんじゃなくて、ただ伴奏してもらって、一緒に　歌ってて楽しいだけ。あ、でも滝島君のことは何も知らないから、もっと色々知りたいって思うよ。一般の合唱団でのこととか、ピアノのレッスンのこととか」
「結局全部音楽ー？」
「うん。あ、でも…もうちょっと違う話もしてみたいかも。音楽のことだけじゃなく、いろいろ。具体的に何か、ってはよくわからないから言えないけど、とにかく滝島君のこともっと知りたいよ」
「じゃあそれ恋じゃんよー」
　なぜそこでブーイングがくるのかはわからないが、周りに言わせればどうやら真紀は恋をしているらしい。こういう気持ちを「恋」と定義するものだと周りは言っているのだ。

「でも…」
本当に、そうなのだろうか。
「恋ってさ、好きな人見るとドキドキしたりするものなんでしょ？」
「はぁ？」
そんなことも知らないのか、と四人同時に声を上げた。
「あんたどんだけ箱入りなのよー！」
「あの、箱入りとかそういうのじゃなくて。なんだろう、最初は全然そんなことなかったんだけど、時々滝島君のしぐさとか見てドキッとしたりとかはあるよ」
「あーだから昨日真紀おかしかったんだね」
鮎美が納得したように頷く。彼女はこのメンツの中でも一番の早食いで、一番最初に食べてしまった卵サンドの袋を所在無さげに弄んでいる。
「うん、それって恋だと思うよ」
「なんだろう…真紀、英敏に会ってから明らかに変わったよ。好きになったから変わったのか、変わるのに英敏が重要な役目を果たしたから好きになったのかはわかんないけど。でも、英敏は真紀にとってすごく大事な人なんでしょ？」
確かに、英敏とのあの会話で明らかに自分は変わったと思う。そうでなければこうして自分の教室で食事などしていないし、最近歌声に張りが出てきた、情感のある歌声だと誉められることもなかったと思う。文化祭のクラス展示の準備にだって参加していないはずだ。
いつの間にかはわからない。もしかしたらあの会話をしたときからかもしれない。真紀にとって英敏は、もはやただの男友達という枠では括れない大切な存在になっていた。
「うん…」
「やっと認めたー」
「って、志織！そうじゃなくて、私は…」
「わかってるよー」

本当にわかったのかそうでないのか、妙にニコニコしながら頷く志織。
「ホラ、もうそろそろ練習でしょ、行ってきなよ！」
と、半ば無理やり背中を押される形で教室を出る。なんとなく、まだあやふやで不確かな感情。これを本当に「恋」と定義していいのだろうか？　そう考えると、練習に行くのが億劫になってしまう。以前とは違った意味で。

Suite. 6

生徒玄関の前を通り、音楽室への廊下を歩く。もはや彼女を指差して笑う生徒などいなかった。

……あれ？

何かがおかしいと思った。なんとなく、今日の音楽室はいつものそれとは違う気がした。音楽室に近づくにつれて、その違和感がどこから来るのかわかる。ピアノの音が聞こえないのだ。そしてドアを開けると、その違和感が現実のものとなる。

……滝島君がいない。

いつも欠かさず、尚且つ真紀より早く来てピアノソナタを練習しているのが当たり前の英敏なのに。

「……」

ヴォカリーズの最初の和音の鍵盤をそっとたたく。上からC♯、A、F♯。たったこれだけの音にあそこまで情熱を傾けられる。それほどまでに熱心な、あの英敏がいない。

ハミングで歌いだしの音をとり、そのまま歌い始める。真紀の歌声には、今日は何も誰も寄り添ってくれない。それならば……。

真紀はひたすらに、自分の胸に渦巻く全ての感情を傾けて歌った。寄り添ってくれる人がいないのならば自分で立つまでだ。英敏の神がかり的な伴奏なしでも倒れないよう、力強く、自らの身体を構成する全てが声帯にでもなったように声を響かせた。

この声が、英敏に届くようにと。

最後の数小節に差し掛かった辺りで、足早に廊下を駆ける音がした。それに気づくと同時に引き戸がガラガラと大きく音を立てる。
「ごめんっ！遅れた！」
英敏だ。よかった、今日も来てくれた。昨日のことで来てくれなくなるのではないかと恐れを抱いたのだが、それは杞憂に終わったようだ。昨日の疲れたような表情はもう既になく、いつもの明るい表情で、でも少し申し訳なさそうに眉を寄せて、英敏はしっかりとそこにいた。
「大丈夫だよ。滝島君ってばいつも早いんだから、たまに遅く来たほうがいいんじゃないの？」
真紀はいつもの穏やかな表情をした仮面を被りなおす。そうしなければいけないような気がした。さっき何となしに歌に込めた感情を隠したかった。
「でも真紀、今日の歌すごかったよ。渡り廊下からでも声聞こえてた」
「そうだった？」
しらばっくれてやる。本当は早く英敏に気付いて欲しかった、なんて恥ずかしいセリフは、真紀にはまだ言えない。
「それで僕も急がなきゃって思って。じゃ、また最初からやる？」
「うん」
柔らかく、しかししっかりと芯の強さを秘めたピアノの音色が、真紀の中の何かを呼び醒ましてくれる。一曲通し終わると英敏がひとこと。
「僕が来る前、何か考えながら歌ってた？」
「え…とくに、なにも？」
まだしらばっくれようとする真紀だが、聡い英敏は彼女を逃がそうとしなかった。
「誰かにあの歌声を届けたかったんだよね？そうでなければあんな声は出せないよ」
「あ…」

英敏が「それ」に気付いているかはわからない。英敏が真紀を同じように思ってくれているかどうかもわからない。しかしその一言で、真紀は確信する。

自分が好きなのは英敏だ、と。鮎美たちが指摘したように、これは恋なのだ、と。

「僕も伴奏ではあるけど、この音をすごく大切な人に届けたいって気持ちはあるから。次はお互いに思いっきりいこう。遠慮なくね」

英敏が再び鍵盤の上に指を置く。今までとは明らかに違う情熱的な伴奏。一度その感情が胸の裡にあることを意識してしまうと恥ずかしいものがあるが、歌で気持ちを伝えるならば許されると思うから。何より英敏だってピアノを介して思いを表現しているではないか。

真紀は決心して、再び、今度は「それ」をしっかりと意識して、英敏への想いを全て歌声にぶつけた。今までに聞いたことがないような、艶っぽくもあり力強くもある歌声。自分のものとは思えない、けれどその声は間違いなく自分の声で。

自分の声帯はこんな表現もできたのかと思うほどその歌声は張りと色気があり、結局二度めの演奏では、やけにエロティックなヴォカリーズになってしまった。

「ヤバいね。こういうのゾクゾクする」

演奏が終わると、少し頬を赤らめ、そのくせやけに男っぽい口調で英敏が言う。

普段は繊細で、それこそ音符やらなにやらでできていそうな英敏。ともすれば女の子に見えそうなほど華奢で線が細いのに。今の英敏は完全に「男」の顔をしていた。そんな英敏など見たことがなかったものだから、真紀も心臓が止まりそうになる。

ヤバいのはこっちだ。そう言ってやりたくなるが、言うことはできない。自分の気持ちに気づいた以上、もはや普通の会話をするのでさえ相当な勇気が必要になっていた。

Suite. 7

文化祭当日まで残り五日。今日の合唱部の練習はは全体の流れの確認である。

コンクールの課題曲と自由曲、合唱曲の定番ともいえる、馴染み深い曲を数曲。間に友情出演の器楽演奏などが入る。

まず坂崎が「蝶々夫人」のアリア「ある晴れた日に」を物悲しげに、しかし美しく、大人の女性の品格を漂わせて歌う。それから、以前からヴァイオリンを習っているという鮎美が「G線上のアリア」を圧倒的な技量で弾きこなす。そして、英敏が演奏するベートーヴェンのピアノソナタ「熱情」。どことなく暗く重い音色で始まり、その後突如にして感情が溢れてしまったかのように鍵盤を激しく、時に優しく叩き曲を織り上げていく。こうして一連の流れを見ると、本当にここは普通の進学校なのかと思うほどの音楽の精鋭揃いである。

その後コンサート本番では休憩を挟み、各学年代表のソロが入る、というようにプログラムが定められていた。

二年生のソプラノ担当である高木弥生の歌う「カルメン」のアリア「何を恐れることがありましょう」が終わった。司会進行をするのはもちろん部長の茜だ。

「……期待の新人、一年林真紀、伴奏は一年滝島英敏です。それではどうぞ」

部員にも坂崎にも、誰にも分からないように、真紀と英敏は視線を合わせる。

「昨日と同じように」

視線だけで会話は成り立った。一見何事もなかったかのように、しかしその実胸の裡には熱いものを滾らせ、二人はそれを「音楽」として歌い奏でていく。

英敏の伴奏が、真紀の歌声がいつもと明らかに違うことに、誰もが気付いたようだ。
アンコールの練習が終わると、練習は一度休憩に入る。野菜ジュースが飲みたくなった真紀は購買に行こうとしたのだが、それよりも早く部員達に道を塞がれてしまった。
「ちょっと！ホントにどうしちゃったの！」
「なんか真紀いつもと違ったよ」
「そんな、私いつも通りに歌ったつもりだけど…」
「いや、あれは違う！どう見ても違う！」
そんな応酬が続き、結局野菜ジュースを買いに行くことができなかった。しょうがないので、チラリと英敏に目をやる。向こうは向こうで坂崎に「熱でも出たの？」などと見当違いのことを言われているようだ。二人の間に何が起こったか誰も知らないから、真紀は周囲のその反応が楽しくて仕方なかった。

Suite. 8

「で、さ。真紀は何考えて歌ってる？」
練習が終わり、また英敏と二人きりになった。最近は茜たちも打ち合わせに念が入っているのか、放課後に話す機会がめっきり減ってしまった。そんな状態だから、必然的に放課後に英敏と二人で過ごすことが増える。そこでそんな質問をされ、真紀は笑顔を凍りつかせてしまった。
「え、な、何？　どしたの？」
そう返す声もひっくり返ってしまった。
「そう言う滝島君は？」
意地悪く聞き返すと、英敏が照れたような笑顔を見せた。初めて想いを歌に託したときのような表情は、やはり美しい。英敏を外見で好きになったわけではない、というかなぜ好きになったのかわからないほどなのだが、ただその表情の変化を見るだけでまた「好き」という気持ちが強くなった気がした。
「真紀だから言うけどさ、僕、入学式のときに一目惚れした子がいて。ただその子が僕を思ってくれているかわからないから、まだ本人に直接『好きだ』って言えなくて。だからその分ピアノで気持ちを伝えようと思ったんだ」
英敏も真紀と同じことを考えていたのだ。その対象が真紀であるかどうかは別として。
「え……？」
表情に現れた動揺が悟られてしまったのだろうか、また英敏はふっと微笑む。
その微笑にまた胸が締め付けられる感覚を覚え、同時に英敏をそこまでの激情に駆り立てるような人物が誰なのか知りたくなった。わざわざピアノソナタをノクターンから「熱情」に、直球ストレートに変えてしまうほどの人間は誰なのか。いや、もしかしたら生徒

ではなく、既婚ではあるが坂崎かもしれない。いずれにしても、もし自分じゃなかったら……という不安はあまりにも大きすぎた。
「それ、誰……？」
「言えない」
「えー」
「今言ってもいいけど、真紀が先に言わなきゃ僕は言わないよ？」
英敏のこの表情には滅法弱い。他の人より僅かに色素の薄い澄んだブラウンの瞳が宝石のようで、あまりに綺麗で、目を逸らせない。嘘もつけない。
「……ハイハイ無理です言えません」
諦めたような、冗談半分の口調で真紀は答えた。
「え、じゃあもしかして告白とか、しないの？　僕はしようと思ってるけど、文化祭で」
文化祭。そういう手があったか、と真紀は思う。ありがちではあるが、その分言いやすいかもしれない。
「私もそうしよっかな」
「そうしときな。後悔しないように、ね」
……滝島君の好きな人は誰なんだろうか。
なんだか気が気でない。
……滝島君が好きなのが私じゃなかったらどうしよう。もしかしたらもうとっくに滝島君は気づいてるんじゃないだろうか。たくさん酷いことを言ったから嫌われても仕方ないかもしれない。
一度悪いほうに考えると、もう悪いほうにしか考えられなくなってしまう。
無意識のうちだった。
「……好き」
なんて、ぽつりと呟いてしまう。それは英敏に聞こえないほど弱弱しい声だった。
「何か言った？」
「さあ、別に？」

何事もなかったかのように、真紀はそっと笑った。英敏がいつもそうするように、少し泣きそうな表情で。

外では午後七時を告げる時報、校内放送のスピーカーからは生徒指導の体育教師の声。文化祭までのリミットは少なかった。五日。それまでに答えを出せる自信は、ない。

Suite. 9

「咲子、私部活の方行くからあと頼んだよ」
「わかった！絶対見に行くからねー」
咲子に一言そう告げると、真紀は黒い幕の張られ、開け放たれた引き戸からひょっこりと出て行った。その服装はいつもの地味な制服ではなく、前面にはアンドロメダ星雲、背中にクラス全員の名前がプリントされた黒地のTシャツ、体操着のハーフパンツという出で立ちだ。教室も、机や椅子が並べられ、ロッカーに辞典やら体操着が詰め込まれた教室ではない。いや、学校そのものがいつもとは明らかに表情を変えていた。
一年三組の教室は、今日はちょっとしたプラネタリウムになっていた。
そう、今日は文化祭。それも、二日目、そして最終日である。すなわち最も各部の発表や各クラスの展示に力が入る日。
県内でもこの高校の文化祭はレベルが高い事で有名で、比較的田舎と言ってもよい場所に位置する割には相当の人が集まる。一年三組のプラネタリウムも好評を博しているようである。

真紀の浴衣は、いわゆる普通の浴衣とはちょっと趣が異なるもので、紫をベースとした薔薇と蝶の柄。中にキャミソールワンピースを合わせると、首もとから交差した細いリボンが覗くというものだ。自分の浴衣を持っていなかったので取り急ぎ姉から借りたものなのだが、部員達はその珍しい浴衣を羨ましがったものである。
「そういえば滝島君は？」
首もとのリボンを直しながら、真紀は鮎美に訊ねた。鮎美もそうなのだが、部員達、そして坂崎も既に着付けは終わっている。あとは友情出演の英敏のみがその場にいない。
「英敏だったらもともとクラスで浴衣着てるはずだよ。それにここ

女ばっかりなんだから着付けとか無理でしょー」
「まあねー。ここで着替えたらセクハラだしね」
などと笑っていると、ドアを叩く音がした。
「着付け終わりましたかー？」
噂をすればなんとやら、英敏だ。
「終わってるよー。英敏もおいで」
英敏の着ていたのは、シンプルな紺の浴衣だった。その華奢な出で立ちの割に、非常によく似合っているではないか。
「……」
「英敏どしたのー？」
英敏、硬直。それも、真紀の胸元のリボンを凝視して、だ。
「おい滝島起きろー！」
茜がニヤニヤしながら英敏を小突くと、やっと英敏は我に返ったようだった。ほんの数瞬前までの挙動不審さは、もうすっかりなりを潜めてしまっていた。
「いや、僕普通に起きて」
「ほーそうかー。なんか真紀の浴衣しか見えてないみたいだったんだけどなー。それもよりによって『コレ』！」
無理やり茜に引っ張られ、胸のリボンをちょいちょいと弄られる。おかげでまたリボンを直す羽目になりそうだ。
「もー茜ちゃん離してってばー！」
必死の抵抗で、どうにか茜の手を逃れることができた。これで真紀はどうにか自由の身になったわけである。
「いやだから、違って……」
もっとも、周りが英敏に気をとられているうちに、真紀もちゃっかり英敏の浴衣姿を眺めていたわけだが。なんだかいつもの彼の繊細さに、更に磨きがかかっているように思える。綺麗だな、と。素直にそう思う。
「でもさー滝島君。浴衣似合うと思うよ？」
真紀が何の気なしに言った一言のせいで、今度は彼女に騒ぎの矛

先が向いてしまう。
「真紀、あんたまで！」
「さっきも『滝島君はまだー？早く会いたーい☆』とか言ってたしねー」
「こら鮎美！誇張しないのー！」
などと言いながら、助けを求めるように坂崎に目をやるのだが、
「あらー若いっていいわねー」
こんなふうに大人の余裕を見せて笑うだけである。
確かにこの乱痴気騒ぎは楽しいからいいといえばいいのだが、いくらなんでもそれはないだろう。真紀が英敏を思っていることがばれそうな状況なのだから。
そんな本番一時間前の音楽室。本番が近くなると、対するものが芸術にしてもスポーツにしても、大抵の人間はプレッシャーがかかることによりナーバスになりがちである。だがしかし、この合唱部の面々だけは別である。本番直前というのにこの和やかさ。いや騒々しさというべきか。それもやはり日頃の仲の良さから来るものなのだろう。

Suite. 10

『ヤバいね。こういうのゾクゾクする』
これは、初めて真紀と英敏が互いの感情をぶつけ合い歌ったあとの英敏の言葉である。
舞台の袖で、それが本当であるとひしひしと感じる。真紀と英敏だけではない。部員どころか坂崎までもが、舞台に立つたびに感じるあの高揚感を覚える。
何度も繰り返しこのような舞台に立っていると、緊張を通り越してある種の快感のようなものすら覚えるようになってくるのだ。
「それではお待ちかね、文化祭定番となりました合唱部サマーコンサート、いよいよ始まります！」
文化祭の総合司会を受け持った放送部の三年生の生徒も、昼休みに週一回あるトーク番組より気合いが入っているようだ。彼女にとってもこの文化祭は最後の舞台、緊張モノであろう。また、悔いを残したくないという思いもあるのやも知れない。

幕が開くと割れんばかりの拍手、スポットライトにフラッシュ。こうなるともうたまらないものがある。
曲の紹介なしに、突如として歌声が折り重なる。ラテン語で綴られた詞が、短調の女性三部合唱で複雑に織り上げられる。最初はコンクールの課題曲だ。静まりかえった会場に響くのは彼女たちの歌声だけ。
「……Ａｍｅｎ」
指揮をする坂崎の指先がくるりと動き、その曲を終わらせる。そうすると拍手と歓声が再び上がった。
「今年も合唱部サマーコンサートの時間がやって参りました、ここからは司会を私菊地茜とさせていただきます」
さすが部長、といった感じだ。放送部員にも負けない流暢な話し

振りである。

そこから真紀と英敏が舞台に立つのは、実にあっという間のことだった。

「…歌いますは期待の新人、一年林真紀、伴奏は一年滝島英敏です。それではどうぞ」

茜の司会進行に、一瞬観客からどよめきが起きた。が、今の真紀と英敏はそれごときのことで怖じ気付いたりしないほどの精神力を身につけていた。もっとも、そのどよめきは一部の心無い人間の間でのみ起きていて、他の観客は、全国レベルの実力を持つこの二人が果たしてどんな歌を歌うのかに関心を向けていたというのもあるのだが。

むしろいつになく挑戦的な視線でチラリと互いを、更には観客を見やるほどの余裕さえある。

これまでに何度も何度も聞いた、それでいて練習時より更に磨かれ艶を増したピアノの音色。もはや伴奏の域を超えてソロとして成り立ってもおかしくないほどである。しかしそれでも歌い手に配慮することは決して忘れないのが英敏の伴奏。さすがといったところである。そのピアノの音色は、真紀の強烈な響きをみせる歌声と一緒に何処までも伸びていきそうな気さえもした。

滝島君がいるなら、大丈夫だ。と。

真紀は曲のラスト、メロディが最高潮に盛り上がりを見せるところでそう自分に言い聞かせ、伸びやかな高音を講堂いっぱい、それどころか渡り廊下にまで響かせた。

やがて歌が終わり、そしてピアノの余韻までもが消えると、一瞬真の静寂が訪れる。そう、真の静寂。誰も何もできないほどに、二人の演奏は素晴らしく、そして圧倒的な力量で聞く者を惹きつけたのだ。

そして、次の瞬間には文化祭史上初となるスタンディングオベーションが待っていた。

……嘘だ、まさか私が。
真紀は一瞬そう思ったのだが、これは紛れもなく現実なのだ。全国で最優秀賞を受賞したヴォカリーズでさえスタンディングオベーションはなかったというのに。
更に、『真紀ちゃーん！』『ヒ・デ・ト・シ！』などと、自分たちと同じクラスの生徒の歓声まで聞こえるではないか。あれほど自分達を毛嫌いしていた人間達が、自分たちの紡ぎ出す音楽によって心を動かされた。音楽をやる人間にとって、これ以上の幸せはないものである。

半ば放心状態になりながらも真紀は大きく一礼し、部員達の列に戻る。続いて英敏も軽く礼をすると、舞台の袖に戻った。その後姿を、誰にも気づかれぬように視線だけで追ってみる。英敏は今何を思っているのか。その華奢な背中は暗く遠く、その心情は彼女には分かりかねた。

プログラムの最後は校歌、というのが毎年のサマーコンサートの定番である。
しかしあの技巧的、尚且つ情感のこもり溢れた歌を聴かされた観客は、決してそれだけで満足するはずもない。アンコールも用意していた曲数では足りなかったほどである。
「それでは、最後までお付き合いいただき本当にありがとうございました！」
茜の最後の挨拶で、サマーコンサートは過去に例を見ないほどの大熱狂の末に幕を閉じたのであった。

やがて幕が降り、舞台袖に部員達が入った瞬間のことだった。
「真紀、あんたほんとよくやったよ」
突然、茜が真紀を抱きしめ泣きじゃくる。茜の中で張り詰めていたものが一気に切れたのだろう。終わったのだ。茜にとって最後の

サマーコンサートが。
「そんな、私何もできなか……」
それ以上は何も言えなかった。言うより先に涙が溢れた。もはや共に舞台袖にいる英敏に涙を見られることなど、意識のかけらにもなかった。そんなことはどうでもいい、とでもいうほどに感情は溢れ、涙となって零れ落ちる。
一方の英敏といえば、決して他人に涙を見せなさそうな、いや自分にさえ涙を見せなかったはずの真紀の豹変振りに驚いたものである。何が真紀をそこまで変えたのか、英敏には分からない。自分の行動が、言動が真紀の感情をここまで揺り動かしたなんて露ほども知らなかったのだ。
ただ、真紀のその涙を美しい、と。それだけを思い、体育倉庫を兼ねた舞台裏をあとにする。茜のように真紀の涙を拭えないのがもどかしくて仕方なかった。
あの役目はずっと一緒に音楽を作った自分が負ってもいいはずなのに、とどこかで思うのに、英敏はそうすることができなかった、しようとしなかった。
「英敏お前やるじゃん！」
「どうしたんだよお前、前よかよっぽど上手くなってねぇ？」
すれ違うクラスメイト達の声には適当に笑みを返すだけで、その内容（ほとんどが彼を賞賛する声であった）などいちいち覚えていられなかった。
……あの綺麗な涙を、自分の指で拭えたならよかったのに。
英敏もまた、真紀が彼に抱いているのと同じ、いや彼女より確固とした思いを胸に秘めていたのだ。

Suite. 11

「只今を持ちまして、第七十五回文化祭の一般公開を終了させていただきます……」

蛍の光の旋律に合わせ、お決まりのアナウンスが流れた。今年の文化祭も、もう終わってしまうのである。

英敏が五日前に宣言した、「一目惚れした子」への告白は、いまだ成し遂げられないままにいた。生徒会の庶務活動であちこちを駆けずり回っていて、とてもそれどころではなかったから。

一方の真紀はといえば更に深刻な状態で、この期に及んでもまだ想いを告げる決心がつかずにいた。

クラスの手伝いが忙しくて考えている余裕がなかった、というのもあるのだが、一番の理由はもっと違ったもので。

……滝島君のあのピアノ、誰に向けて弾いたんだろう。

あんな音色は本番だから云々とか、そのような問題では出せないものだ。自分の歌がそうであったように、きっと英敏もそうだったに違いない。

「真紀、真紀？」

「うわっ」

声をかけてきたのは咲子だった。真紀も彼女も、既にTシャツではなく、いつものあの制服に着替えていた。

「もうクラスの方落ち着いたから、あとは部活の反省会行っておいで」

部活の反省会、もうそんな時間か。彼女が物思いに耽っている間にショートホームルームが終わってしまったらしい。

「あれ、もう……」

「何回声かけても反応しないんだもん、立ったまま寝てんじゃないかって思った」

「んなわけないでしょー」

いつもの真紀ならば思いっきりツッコミのひとつでも入れているところだが、その声にはその平常時のノリはない。そして咲子がそれを見逃すわけもない。咲子はいつだって聡かった。
「考えてたのって……滝島君のこと？」
その耳元でこっそりと言うと、真紀の肩がピクリと僅かに反応したのがわかる。
実は咲子も、こっそりと音楽室での二人の様子を見ていたのだが、そこに流れる空気はどこか特殊で、絶対に自分は入り込めないようなものだと思っていた。
そして、今日のあの演奏。咲子には、まるで音楽でお互いに思いを告げているかのように聞こえた。そこで確信するのは、二人は思い合っているのに全くそれに気づいていないということ。
実際サマーコンサート終了後、こっそりといつもの昼食メンバーにこの話をしていたのだが、志織も薄々感づいてはいたようだ。そして合唱部で真紀と英敏の演奏を何度も聞いている鮎美と里香に至ってはこう言う。
「みんなで気ィ遣って二人っきりにしてやってんのに進展ないし、いつも練習ばっかりしてるもん、あいつら」
彼女達も感づいていたらしい。更に続けられたこの言葉が、咲子の確信をより深めていく。
「それに英敏ってば、友情演奏の曲、最初はショパンのノクターンだったのにさ、いきなり『熱情』にするなんて大胆な真似してくれて。真紀のソロの伴奏するときなんて明らかに目の色違うもん。ありゃ絶対告白してるようなもんだって。真紀は鈍いから気づいてないだけかもしれないけど」
そうして今、真紀本人と話しているのだ。
「なんでわかったの……？」
「あんな演奏聞かされりゃあ分かるも何もあったもんじゃないって」
音楽に関しては神がかり的な才能を持つ代わり、筋金入りのニブチンになってしまったのだろうか、この娘は。そう心中で毒づきな

がら、咲子は言葉を繋げた。
「真紀も英敏も気づいてないだけ。周りは皆気づいてるんだよ、二人が好き合ってるの」
「……え？」
「意味わかんないなら尚更行っておいで」
そうやって真紀を教室から追い出す。夕陽になりかけの熱い西日が廊下を眩しく照らし出していた。

「三年間やってきた中で、こんなにいい舞台を踏ませてもらったのは初めてだった」
との茜の挨拶で始まったミーティング。咲子の言葉に期待を抱いて音楽室に足を向けた真紀だが、そこに英敏の姿はなかった。当然かもしれない、おそらく生徒会事務局もミーティングや物資の回収でもしているだろうから。
ここでのミーティングの間も、真紀はなんとなく落ち着かなかった。英敏も友情出演であったとはいえ、一緒に演奏をした仲間なのだ。この場にいるべきだと真紀は思うし、いてほしかったと思う。
仲間。英敏と出会う前の彼女なら、そんな言葉を聞いたら鼻で笑っていたに違いない。何より彼女にとって、英敏はもはや仲間だとか親友だとか、そういった枠で括れる人間ではないのだ。
「……おーしそれじゃミーティング終わり！打ち上げ行くかー！」
すっかり「部長の顔」を放棄し、一人の高校三年生の少女になった茜が、そう部員達に声をかけて回る。どうやら皆でカラオケにでも行くらしい。それがこの部の恒例だったから。何かにつけて打ち上げやらハロウィンやら理由付けをしては、音楽室でパーティーをするのである。下手をすれば学校近くのピザ屋からピザを買い、持ち込むことだってあるほどだから。
「真紀も来るでしょー？」
一見すると尋ねているような言葉遣いに思えるが、真紀には「来るよねーつーか来い、いや当然来るんだろうなおい」に聞こえた。

茜らしいといえば茜らしいのだが。
「あ、私はちょっと……」
「お？珍しいじゃん。カラオケ行けばマイク離さないで熱唱するのに」
訝しがる茜の後ろから、里香がやけにニヤニヤしながら声をかけてくる。
「あれだよ、真紀行くところあるもんねー」
「ちょっと里香、何……」
「ああ、なるほどねー了解了解」
「茜ちゃんも納得しないの！」
急に顔を真っ赤にして慌てふためく真紀に、意味深な視線を投げかけてやる。
「それとも何、気づいてないと思ってた？」
「だから何にって……」
そんなこと聞くまでもない。真紀が自我を失い動揺するようなことといえばたった一つしかないのだ。茜だって気づいていたし、だからこそ放課後は彼女達に気を遣って音楽室から出たものである。気づいていないのはいつだって真紀本人だけ。
彼女が孤立したときだって、茜は、いや合唱部員達は救いの手を差し伸べたのだが、彼女はそれに気づくまでに実に二ヶ月近くを要したのだ。今度は更に「恋愛」という厄介な感情が絡んでいる。時間はいっそうかかるかもしれない。それならばその背中を押してやるまでだ。
「気づかない方がおかしいっての。今日は真紀、あんた打ち上げ参加禁止！英敏の所行ってきなさい。これ部長命令だからね」
何たる部長命令だ、と真紀は心底呆れたのだが、それが少しありがたくもあった。
おそらくこれを逃せば、英敏とゆっくり話をする時間などないだろう。なにせ彼は「未来の生徒会長」と呼ばれる人間なのだ。どんどん生徒会の仕事が忙しくなり、音楽部の手伝いに来ることは少な

くなるだろう。そして何より、英敏と一緒に演奏する機会は十月の市民文化祭までないのだ。今を逃していつ言うのか。
「茜ちゃん、恩に着るよ」
「あとで卵サンドかなんかおごってよねー」
などと軽口を叩きながら、茜は音楽室を出た。他のメンバーもそれに従う。
「がんばっといで」
「大丈夫だからね」
鮎美も、里香も応援してくれている。ここで行かずにいつ行くというのだ。
「多分あいつなら屋上いるんじゃないかな。本番の演奏終わると、あいつ燃え尽きて一人でぼんやりする変なクセ……」
鮎美が言い終わらぬうちに、真紀は弾かれたように部員達をかいくぐり、廊下に走り出ていた。

Suite. 12

屋上はどこだ。たしか管理棟の上だったっけ。そうだ、保健室の上だった気がする。

特別教室棟の渡り廊下を抜け、図書室のガラス張りのドアも無視して生徒玄関前を通り抜け、窓から屋上の様子を見る。

男子生徒の制服。あの眩しいほど白いシャツに、女子生徒と見紛うような背丈と線の細さ。楽譜やら音符やらそういうものでできているのではないかと思うほどの繊細さ。そのくせ後姿はしゃんとしている。

間違いない。

真紀は更に走るスピードを速めた。階段など一段飛ばしである。制服のスカートの中が下からは丸見えになってしまっていて、例のギャルの集団がクスクスと意地悪い笑いを浮かべていた。しかしそんな奴らに構っている場合ではないのだ。真紀の頭の中にはもはや英敏のあの背中の映像しか映っていない。

屋上に出るドアの前で大きく深呼吸する。英敏を見つけたから走ってきただなんて、恥ずかしくて言えない。これでは「好きです」などと言えたものではないのに。

ドアを開けると、文化祭の最中の賑わいはもはやなく、午後五時を告げる市内放送、ウェルナーの「野ばら」が流れていただけだった。

……なんて静かで、哀しい風景なんだろう。

胸が潰れそうな思いになる。

今更になって思う。果たしてこれから自分がしようとしていることは、本当に正しいのか、と。

彼女の周りはそれを「恋」だと言い騒ぎ立てるのだが、真紀自身は一度確信は持ったものの、まだなんとなくわからない感情で。一

体何をどうしていいのかもわからない。ただ好きだと自分の思いを告げるだけで、何があるというのだろう。
これが「初恋」（友人や部活の面々に言わせれば）の真紀にとっては、英敏といわゆる『両思い』になったとしても何をすればいいか分からなかったし、何より自分の胸に燻る思いを彼が受け入れてくれなかったらどうなってしまうのか不安でならなかった。
「あれ、真紀？」
先に声をかけてきたのは、英敏のほうだった。やはり彼は目敏い。彼女が英敏を見つけるより早く、彼はドアのあたりに佇む真紀を探し当てたのだ。
「滝島君、いたんだ」
「何かあったの？」
「ううん、文化祭終わるとこんなに静かになるんだなーって思ってさ」
後片付けはまだまだ代休のあとに残っているのだが、この学校は文化祭の賑わいからひっそりと逃れ、今はいつもの学校の佇まいを再び取り戻そうとしている。これがいつも通りのはずなのに、これが当たり前だったはずなのに、なぜこんなに寂しいものなのか。
「中学のときの文化祭では、正直ここまで寂しくならなかったよ、私」
そっと、緑のビニールでコーティングされた金網の高い柵に寄りかかって真紀が言う。
「僕も。何だろうね、すっからかんになったみたいな気持ち」
「ね。どうしてこうなっちゃうのかな……」
言うなら今だ。真紀の心の中で誰かがそんな風に彼女を駆り立てる。自分がこんな気持ちになるのは恋をしているからだ、英敏がそばにいるからだ、もう英敏と一緒にあのヴォカリーズはできないからだ、と。
しかし一方で、さっきのように恐怖を抱いている自分もいる。自分の汚いところを全部微笑みで受け止めてくれた彼だが、果たして、

この今までにない特殊な感情を受け入れてはくれるだろうか。その保証はないと思う。
「ねえ、滝島君」
暫くの沈黙の後で先に口を開いたのは、当の真紀だった。
「？」
「前言ってたでしょ、好きな人にどうのこうの、って」
「ああ、あれか……」
英敏の心中も穏やかではなかった。
彼女は全く気づいていないのだ。あれだけ思いを込めて伴奏したのに、ピアノソロをわざわざ直球で「熱情」第一楽章にしたのに、その理由には全く気づいていない。
英敏としては、あの演奏で真紀に思いを告げたようなものだ。具体的に言葉にするにはあまりにも激しくて、重苦しくて、いじましいほどの重みのある感情だった。それを直接言葉で表現することなど、まだ十五歳の英敏にはできなかったし、言葉にすることで真紀を傷つけることにもなりかねなかった。だからこそ、自分の気持ちを音楽に託したのだ。言葉にできないほどの恋慕で真紀を壊したくなかったから。
……僕があの曲を贈りたかったのは、誰でもないのに。真紀だけなのに。

腰まで届きそうな真紀の長い髪が風に揺れるのを見ていた英敏は、不意に入学式でのことを思い出す。
毎年この高校では、入試でトップの成績を叩き出した者が新入生を代表して挨拶をすることになっていた。そこで挨拶の晴れ舞台に立ったのが、今横にいる少女、林真紀だったのだ。英敏はその様子を新入生約三百人の中から見ていた。同じ音楽を嗜む人間であるため、名こそは知っていたが、こうしてその少女を目にするのは初めてである。
真紀の纏う雰囲気は、今まで出会ってきた少女達とは明らかに違

っていた。
決してあの年代の少女達のように、妙にはしゃいだりはしない。佇まい、立ち居振る舞い、その声、指先の動きひとつとっても、彼女はあまりにも美しかった。大人びていた。纏う空気が高校一年生になりたての女子生徒のものではないのだ。
「凛」その言葉が、彼女を形容するのにもっとも相応しいもの。流暢に挨拶文を読み上げる真紀を見上げながら、英敏はそう考えていた。
「新入生を代表して…」
この瞬間、英敏は完全に、真紀に一目惚れしていたのだ。自分ごときが手を出せないような女に、である。
そう、英敏は始めから真紀に手を出してはいけなかったのだ。それを忘れるなど愚かしいにも程があるのに。

数分考え、そして悩んだ後、彼はこう口にした。
「……やっぱり、ダメだった。気づいてもらえなかったし、僕なんかじゃその子に見合わないから」
「……」
下手に先走りしなくてよかった、と真紀は思う。あの軽いジャブ、たった一言で結果はわかってしまったのだ。
「真紀は？どうだった？」
答えは、英敏のさっきの言葉で確かなものになった。

「私もダメだった。言えるわけないよ」

Ｆｉｎｅ．フィーネ。彼女の心の中で奏でられた拙い恋の歌は、彼女が自らの手で終わらせてしまった。拙すぎて幼すぎる十五歳の初恋はいともあっさり終焉を迎え、同時に真紀は十六歳になった。
こうして大人になっていくたびに、この感情が何なのか、自分の中でもはっきりするのかもしれない。

けれど、それは一体いつのことになるんだろう。夕暮れの空を眺めても、まだ幼い真紀にはそれがわからなかった。
「生徒の皆さんに連絡します、まもなく下校時刻となります……」
生徒指導の教師が校内放送をかけるまで、二人は黙って柵の下を見下ろしていた。自分達も帰らなきゃいけないのに、帰りたくなかった。どちらかが「その言葉」を口にすれば、この重苦しい空気が変わるかもしれないというのに。それでも、二人とも決して「それ」を口にすることはなかった。
「…滝島く」
「英敏でいいよ」
そういえば、いつか似たような会話をしたことがあったが、立場はすっかり逆になっていた。あのとき真紀はひどく投げやりに呼び捨てにすることを命じたが、英敏が同じことをしたのには違う理由があった。
自分の恋は散ってしまったが、せめてその綺麗な声で、自分の名を紡いでほしかったから。

Suite. 13

バスの中で、真紀は耳を塞ぐようにヘッドホンをかけていた。ヘッドホンから微かに漏れ聞こえるのは、ベートーヴェンのピアノソナタ「熱情」第一楽章。

文化祭で英敏が演奏したものや、自分達の歌った歌を録音し、それをＭＤにして出演者の手元に保存しておく。これは毎年、サマーコンサートのたびに放送部に録音の協力をしてもらって行われていること。真紀が聞いているのは一年生のときのサマーコンサートのものである。

もちろん英敏もこのＭＤを持っていることになるのだが、高校三年になった彼は今でもこれを聞いているのだろうか。

情感のこもった、いやそんな程度の表現では事足りず、感情の赴くままに激しく弾き鳴らされたピアノ。

静かでありながらも熱と溢れんばかりの恋慕に色づけられたピアノ伴奏。それに乗り、しっかりしゃんと背筋を伸ばしたような一年生の頃の真紀の歌声が流れる。ヴォカリーズのソロ。真紀が全国でトップに君臨したのもこの曲で、今まで何も知ろうとしなかった自分に恋と友情を教えてくれたのも、この曲だった。歌詞のないシンプルな曲なのに、これほどまで思いが込められるものなのか。驚かずにはいられない。

中学時代のことか。ヴォカリーズを作曲したのと同じ作曲家、ラフマニノフのピアノ協奏曲第二番を音楽の授業で聞いたことがあった。

シンプルそうに聞こえて複雑に絡み合った音たちが地の底を這い回るような、そんな印象を受けた。

様々な負の感情の交錯。そして生きることへの喜び。

彼女は感想文にそんなことを書いたような気がする。もちろん、

こんな大人びた表現ではなかったが。
思えば、彼女はどこか早熟だったが、同時にどこか未熟だったのかもしれない。そういう年頃なのだと自分では思っていたが、実際は違っていたらしい。それを教えてくれたのが、このサマーコンサートの一部始終が録音されたＭＤだった。
「次は、中央高校前、中央高校前です。お降りの方は……」
ふと顔を上げ、慌てて降車ボタンを押そうとするが、他の生徒が押したようだった。真紀の指先で赤紫色に光るランプ。バスの中で焚かれている暖房と、もうすぐ来る春の柔らかな熱の中で、真紀はＭＤプレイヤーの電源を落とした。淀みなく流れる自分の歌声と、英敏の伴奏が突然に途切れた。本番でこのようなことが起こるなんて、考えただけでぞっとする。
あれから英敏と顔を合わせることも滅多になくなったし、たまに会っても軽い挨拶程度になっていた。何か話をするなんてできるはずがない。お互いに、これ以上距離を縮めることを無意識で避けていたのかもしれない。
彼女は高校総合文化祭の終了をもって部活を引退するまでに、それから二度、文化祭でのサマーコンサートを経験した。
二年生のときは里香と鮎美にソロを任せ、最後の文化祭では「Ｎｉｎａ」というイタリア歌曲を英敏の伴奏で歌った。練習は一年の時と同様に毎日のようにしていたが、当時のような深い話はできなくなっていたし、する必要もなかった。ただ互いに音楽面での指摘をしあうだけである。サマーコンサートそのものは、やはりスタンディングオベーションで終わった。最後の舞台。あの時茜が涙した理由が、今分かった気がした。
折りしも卒業が近づき、英敏は就職のために自動車学校に通う毎日。高校に顔を出すことは殆どなくなり、一層話す機会はない。一方の真紀は今度こそその夢を叶えるため、音楽大学を受験した。現在はその結果待ちであり、今日は卒業式の予行練習である。そして明日には卒業式を迎え、更にその翌日には音大の合格発表も控えて

いる。

「……卒業生代表、滝島英敏」

卒業式の予行。もはや彼の行動の揚げ足を取ったりする者は誰一人としていなかった。前期生徒会長として、そして卒業生代表として堂々と答辞の最後の部分を述べる。こうして舞台に立っている英敏を見ると、一年の頃は真紀とそれほど変わらなかった背格好も、今ではすっかり男のそれとなっているのがわかる。ピアノに触れる指先も、今では繊細さより男性らしさの勝ったものとなった。しかし演奏のスタンスはやはり変わらず情感に満ちていて、ともすれば女性らしさを感じさせるものである。

そして昔のような豊かな感情を取り戻した真紀も、歌声に更なる磨きをかけ、再び全国コンクールでトップの座に立った。それも、高校二年、三年と二年連続の快挙である。実生活でも明るく人当たりがよいため、新しい友人もできたし、行動範囲も広がった。レッスンを疎かにする事は絶対にしなかったが、行動範囲や友人の質など、そのようなちょっとした変化で、より曲想にも幅が出たのである。

互いの変化に一層思いを募らせるものの、やはりその一線は越えられないまま。越えたいけれど越えてはいけない、と互いに思い込んでしまっているのだ。

なんとなく帰る気がしなかったので、放課後、真紀はいつもの友人とともに校内を宛てなく歩き回っていた。そして思い出の場所に来ては、志織の持っているデジカメで写真を撮る。そんなことをしていたら、生徒会室から英敏がひょっこり顔を出したではないか。

「あれ、英敏まだ帰ってなかったの？」

真紀が口を開こうとしたその瞬間に、鮎美が先に声をかけてしまった。

「鮎美たちこそ。まだ残ってたんだ、なんだか帰りづらくって」

思うところは英敏も同じらしい。生徒会の後輩達に感謝の言葉を述べ、これから真紀たちのように校舎内を歩こうと思っていたということだった。

「じゃあ英敏も一緒においでよ、あたしたちカメラあるし」

鮎美の言葉に異論を唱える者はいない。むしろ真紀の件もあるので大歓迎である。

例の地味な制服に学ランを加えた六人の仲間たちで、生徒玄関の前を通り、特別教室棟への渡り廊下を歩く。こうして音楽室に向かうのも、明日で、ともすれば今日で終わってしまうのだ。着慣れなかったあの地味な制服も、三年の時を経た今ではすっかりくたびれてしまっている。

「真紀」

鮎美たちが何か話している中、突然英敏が真紀を呼び止める。

「ん？」

「……また歌おうか」

「何を？」

英敏の意図するところが読めないまま、鮎美たちに促されて真紀も音楽室に入った。初めて英敏と会ったときも、似たようなことがあったっけ。三年ほど前のことなのに、その記憶はひどく鮮明だった。

Suite. 14

グランドピアノが二台、教室で使っているのと同じ机が教室と同じくらいの数だけ並んでいて、黒板は普通の教室で使っているものと五線譜の二重になっている。音楽室の後ろの方には、合唱部で使っているハーモニーディレクターが三台。掲示板には音大の募集要項やクラシックのコンサートのポスターが貼ってある。

まだ日は短く、冬は長い。明日から三月だというのに、外では低く雲が垂れ込めて、ほろほろ雪が舞っていた。

「ねえ、みんなで写真撮ろうよー」

さっきまでと同じように、志織がデジカメ片手に笑顔を見せた。外も音楽室も眩しくないのに、その笑顔はなぜか真夏の西日を見ているかのようだった。合唱部員ではなかったとはいえ、志織も音楽選択生だったのだ。この場所を離れるのが惜しい気持ちは合唱部の面々と変わらない。

「当然！英敏もおいで」

里香がちょいちょいと手招きすると、英敏も頷いて彼女達に近づく。

「英敏君、こっち来て」

真紀も英敏を促す。できるだけ不自然にならないように。二人並んで写真を撮るなんて滅多にないことなのだ。演奏会でソロを歌い伴奏をつけてもらったときに数枚写真を撮ってもらったが、英敏はいつも漆黒のピアノの陰に隠れていて、まともに一枚の写真に収まったのは一度もない。一枚ぐらい、制服で二人並んで写真に収まってもいいのではないだろうか。そのくらいなら、きっと英敏も許してくれるだろうから。

「あ、英敏は真紀の隣ね」

まるで当然のことのように鮎美が言ってくれたことにも感謝しなければいけないな、と思う。ピアノを背に、膝立ちになった真紀と

英敏を囲むようにして、里香、咲子、鮎美、志織が並ぶ。真紀と英敏の肩に誰かの手が置かれている。或いは腕を組もうとする者もいたりする。そんな無茶苦茶な状況で撮った一枚の写真。きっとこれは一生大事にするだろう。シャッター音とフラッシュの中、誰もがそう思っていた。

しかし、誰もが、厳密には真紀と英敏以外の誰もが気づかなかったことがある。

どさくさにまぎれて、後ろで繋がれた二人の手。冷たそうな、ごつごつした英敏の手に、真紀の石膏像のような手が重なる。離れないようにそっと指先を絡めると、胸の奥がつんとした。

泣き出しそうな笑顔。真紀の感情の全ては、それだけで説明がついた。

「じゃあ……ここで一通り回ったことだし。そろそろ帰ろうか？」

名残惜しそうに咲子が音楽室を見渡す。

「そうだねー……また明日も会えるんだから、今泣いたってしょうがないしね」

鮎美はそんなことを言っているが、もう既にその瞳には涙をいっぱいに溜めてしまっている。やはり、彼女にとって音楽室は離れがたい場所なのだ。三年間を、自分の青春の全てを、この場所に捧げたのだから。

「うん……じゃ、帰ろう」

「待って！」

瞬間、真紀は思わず声を上げていた。

「どうしたの？」

「音楽室の鍵、私が返しに行くよ。……もう少し、ここにいたいから」

もう少しここにいたい。いや、もう少しなんていう可愛い次元ではない。ここから離れたくない。明日が来ないといい。卒業したくなんかない。永遠なんていう言葉は信じないけれど、今だけは信じさせてほしい。

……お願い。今だけは英敏君のそばにいさせて。
「あ、そっか、真紀たち……」
真紀の言葉で、誰もが全てを察したようだった。それに、あそこで英敏を連れてきたのは他ならぬ真紀の目があったから。それまで互いに接点がなかった二人に、最後の接点を与えてやりたかったから。一年生の頃の、あの夏のように。
「うん、じゃあ鍵、頼んだよ」
「任せといて」
ひょいと投げられた鍵を、ものの見事にキャッチしてみせる。
「英敏ー？真紀に変なことしたらあたしたちが許さないからねー」
「するか馬鹿」
こんなやりとりが日常茶飯事だったのに、その日常茶飯事がなくなってしまう。
英敏はこの少しだけ田舎寄りの街に残り、市役所の職員として仕事をすることになる。
一方の真紀は音大を数校受験した。滑り止めで受験した音大は既に合格が決まっていて、しかも時々は英敏のいるこの街へ帰ってこられるのだ。しかし彼女はもっとレベルの高いところを目指しているので、現在はそこの結果待ちである。しかしそうなると、世界レベルの歌唱力を得る代わりに英敏と会う機会を失ってしまう。
……もう会えないのなら、いっそ。

Suite. 15

音楽室の引き戸が閉まる音、そして友人達の嗚咽が聞こえる。
ごめんね、みんな。帰っていく友人達の背に心の中で言葉をかける。
「真紀？」
「あ、ごめんっちょっと考え事してて…」
振り返った真紀の視界も霞む。あ、やばいと思ったら、もうその瞳の端から、あの生暖かい雫が零れ落ちていた。
「……やっぱり、鮎美たちと帰ってもよかったんだよ？」
英敏は酷く寂しそうに口にしたが、当然これは思っているのとは逆だ。一年のときを思い出し、茜のように真紀を抱きしめ、その涙を拭ってやりたいとさえ思っていた。
チャンスは、今しかない。
けれど、行動には移せない。どうしてなのか、肝心の一歩が踏み出せない。あの頃となんら成長できていないのが悲しかった。
「だって、さっき歌うって言ったの英敏君でしょ？　だから残ろうって」
さっきの言葉の意味を、彼女は本当に理解しているのだろうか。またあの夏のように、何の気にも留めていないとしたら。
「本当はそれ目的じゃないんだけどな……」
ぽつりと呟く英敏。いつか真紀が、英敏に「好き」と、聞こえないように思いを伝えたときのように。
「そうだね。せっかく鮎美たちに気遣わせちゃったし」
いつもの調子で、英敏が椅子の調節をし、その足をペダルにのせた。少し男性らしさを増した指先は、「あの曲」の出だしの鍵盤に置かれている。
「え、歌うって……その曲……」
英敏は何も答えずに、あの重苦しいヘ短調の音色を奏でていく。

そして全ての感情をぶつけるかのように、あの時より更に激しく鍵盤を叩いていく。
ベートーヴェンのピアノソナタ「熱情」。
「え、英敏君ってば」
「いいから聞いてて」
その指先は自在に白と黒の鍵盤を行き交って、真紀への思いを改めて音楽で綴りあげていく。
一通り演奏し終わるまで、おおよそ十分半か。その間真紀も何も言えず、ただ英敏の演奏を聞くばかりである。
……英敏君はこの演奏で何を伝えようとしているんだろう。しかも、……私に。
一年の文化祭では観衆があまりに多かったので分からなかったのだが、今ならわかる。
この演奏には、他の誰でもない、間違いなく自分へのメッセージが込められているのだ、と。きっとあのときもそうだったのに、どうして気づけなかったのだろうか。
「……ふぅ」
真紀の見開いた瞳には、満足げに息をつく英敏が映っている。三年前とはまた違った面持ち。
「真紀？どうしたの？」
「……前に英敏君、言ったよね」
英敏の問いには答えない。真紀はやや早足でピアノに向かい、持っていた楽譜を英敏に手渡す。
「これ、伴奏してもらえるかな。そうすればきっと私の言いたいこと分かると思うよ」
彼女が渡したのは、すっかり擦り切れてボロボロになり、一部が変色しかけた五線譜。
一瞬あっけに取られたような表情で真紀を見やる英敏だったが、すぐに納得したように頷き、その面にあの人懐っこそうな微笑を浮かべた。

「『これ』出された時点で気づかない方がおかしいよ」
やはり二人で「歌う」ヴォカリーズは、あらゆる意味で一年の頃をはるかに上回るものだった。
歌唱力だけでなく感情の表現の幅も広がった真紀の歌に、心の琴線にそっと触れるような英敏の伴奏が上手く絡み合い、柔らかく、しかし確固たる響きをもって音楽室に恋の旋律を奏でていく。
文化祭のときのように、観客がいるわけではない。まして坂崎がいるわけでもない。完全に二人の自己満足の世界だ。
やがて、その演奏も終わっていく。これで終わりなのだ。今度こそ高校生活が、いや、高校での音楽生活の全てが終わった。
ピアノの余韻が消えた直後の一瞬の静寂はあの文化祭と変わりない。しかしスタンディングオベーションはなく、逆に真紀がくずおれて、声をあげて泣き出した。
「私、やだよ、こんなのやだよ……」

Suite. 16

しゃくりあげながら必死で英敏に訴えかける姿があまりに痛々しくいとおしく。今日の英敏はやはり何かがおかしかった。明日で真紀に会うことはなくなるかもしれない、そういう思いがもはや隠しきれぬ域まで達したのか。

カーペットの敷かれた床に座り込んで、ぼろぼろと涙を流す真紀の肩をそっと抱いてやる。

「……英敏君？」

「誰も見てないから。僕の前でなら泣いてもいいよ。大丈夫。変に思ったりしないから」

「でも、こんなの情けないよ」

「情けなくなんかない」

最初は肩を抱くだけだった英敏の腕は更に積極性を増したようで、今度はしっかりと真紀の華奢な身体を抱きしめる。

一年の頃はそんなに体格が変わらなかったはずなのに、と英敏は思う。むしろ自分より真紀のほうが大人っぽくて、しゃんとしていて、しっかりした背中だったのに。今、こうして英敏に身を預けている真紀の身体はあまりにも細く小さい。いつもの自信に満ちた林真紀はそこには存在しない。林真紀は、もはや三年間の思いに潰されそうになり涙する、一人の十八歳の少女にすぎなかった。

「三年なんて短すぎるよ。一生のうちのたった三年だよ？」

「うん」

「どうして英敏君にもっと早く会えなかったの、どうして鮎美とか里香みたいに英敏君と同じ中学じゃなかったの、どうしてこの曲でしか私たち繋がれないの……？」

もはや言っていることは滅茶苦茶。真紀の脳はまた暴走し始めていた。一年のときのように、また「言ってはいけないこと」を口にしてしまいそうだった。しかしそれにさえ真紀は気づかない。英敏

の優しさがあまりにも胸に刺さって苦しいから。
「この曲でしか繋がれないなんて寂しすぎるよ。私もっとたくさん英敏君と繋がってたかった」
「うん」
あまりに真紀が感情的になっているので、英敏はただ頷くことしかできない。今までにも何度か真紀はその鬱屈した感情を爆発させてはいたが、今回の爆発はいつになく大規模なもので、英敏もどう対応すればいいかわからなかった。
「ごめん……」
一言呟いて、更に強く真紀を抱きしめる。腕の中で少し弛緩する真紀の身体。こうすることで彼女が落ち着いてくれるなら、それ以上に嬉しい事はない。
「もうしばらく、こうしててい……？」
震える真紀の声。英敏に身を預け、いくらか安心し、落ち着きを取り戻したのだろう。
「ずっとこうしてたいけどね、僕は」
「うん……」
英敏の言葉に含まれた裏の意味には気付かず、いやわざと気付かぬ振りをして頷く。ただ純粋に、抱きしめてくれる腕が、胸が、英敏の匂いが優しかったから。その優しさにもう少しだけ甘えていたかったから。

どれほどの間、そうしていただろうか。どちらからともなく体を離すと、英敏は自分の鞄から、大きな正方形の板状のものを取り出した。今日渡った、卒業アルバム。
「はい」
「？」
急にそれを差し出された意図が、真紀には分からない。そんな様子の彼女に、少しだけ困ったような表情を見せ、アルバムのページをめくっていく。最後のほうには、、まだ真っ白な寄せ書きスペー

スがあった。
「僕たちがこうやって出会えた記念に、何か書いてみてよ。真紀のアルバムにも、書きたいな」
そこで、彼が何を言いたいのかが分かった。真紀も同じように卒業アルバムをめくる。ふざけたようにピースサインを送る英敏の写真、ヴォカリーズを一緒に歌ったときの写真、そして真紀が鮎美たちと一緒にじゃれあいながら昼食をとっている写真。ありがちな表現だとは思うけれど、
……私の大切な三年間が、このアルバム一冊に収まっているんだ。
と思う。なぜか涙はもう既に引っ込んでしまっていて、代わりにピンク色のインクのボールペンを取り出した。
「ｍｏｌｔｏ　ａｍｏｒｏｓｏ　林真紀」
さらさらと書き上げる。そうしてその下に、「英敏君と歌ったヴォカリーズは、一生の宝物です」
そう記した。モルト・アモローソ……直訳すると、「非常に優しく、愛情ある」となる。真紀が英敏に抱いている印象そのものだった。
一方の英敏も、青いインクのボールペンで、真紀の卒業アルバムにこう記した。
「ｍｏｌｔｏ　ｅｓｐｒｅｓｓｉｖｏ　滝島英敏」
モルト・エスプレシーヴォ。「非常に表情豊かに」それが、英敏から見た今の真紀。
「じゃあ、帰ろう、私たちも」
「そうだね……また吹雪いてきた」
結局ここでも、ここまできても、二人は互いの思いを直接口にすることができなかった。

終楽章

久しぶりに、単線ホームの小さな駅に降りる。二両編成の緑の電車も、赤いボーダー模様のバスも、高校を卒業した頃となんら変わりなかった。

変わったのは、長い黒髪をばっさりと切ってしまったこと、自分が二十二歳になっていること。

そして、肩書きが「女子高生」から「日本を代表する歌い手」「市役所職員」になったこと。

彼女が市役所の職員に採用され、故郷に帰ると聞き、大学時代の教授は驚いたものだった。日本でもトップクラスの実績を数多く残しているこの大学で、是非博士課程まで取って教授として残って欲しい。と。しかし真紀は何人ものその言葉にただ首を振るだけだった。

「詳しくは言えません、けれど、私の本当の居場所は故郷に他ならないんです」

と、ふわりと微笑んで。

今日こうして帰ってきたのは、市役所への採用が決まり、配属となる総務部に顔を出すためだった。実際にそこで働き始めるのはまだ二週間ほど先になる。

黒いスーツに白いブラウスで颯爽と歩く彼女には、高校時代の面影は残っていなかった。時々英敏のことを思い出すと、その表情を高校時代のそれに戻す。そこに惹かれた男子学生に何度も言い寄られたが、彼女はそれすらも笑顔で拒んだ。

卒業式の前日に抱きしめてもらった、あの温かさが忘れられなかったから。

市役所に入ってすぐ、右手には受付や他の建物への渡り廊下、左

手には市民課があり、目の前には地下の売店や二階、三階へ向かう階段がある。真紀が配属される総務部は二階まで階段を上ってすぐの場所。
面接試験で一度ここには来たことがあるのだが、やはり役所独特のピリピリとした堅い雰囲気には慣れない。後ろから彼女にかけられた声にさえ気づかないほど、真紀は緊張していた。
「失礼します」
「ああ、林さんですね。こちらへどうぞ」
職員に促され、総務部長の席へと連れて行かれる。と、総務部のドアが慌ただしく開けられた。
「どうしたのー滝島くん、そんなに慌てて」
真紀の目の前にいる職員がそう言うものだから、真紀も思わず弾かれたようにそちらに目をやる。
「はぁ、真紀ってば何回呼んでもシカトするんだから……」
そこにいたのは、滝島英敏、まさにその人だった。黒味が強いグレーのスーツに水色のシャツ、淡い黄色のネクタイ。真紀の中での英敏は学生服のままだったから、スーツ姿に違和感さえ覚える。
「あれ、林さんって滝島さんのお知り合いなんですか？」
若い職員が尋ねると、英敏が頷く。
「はい、同じ高校で、同じ学年だったんですよ」

「でもさ、真紀。真紀だったら世界レベルでも歌えたのに、どうしてこっちに帰ってきたの？」
市役所での昼休み。本来であれば真紀はもう帰っても良かったのだが、食堂に行こうと英敏に誘われたので、少しついて行くことにしたのだ。高校時代、志織たちと時々学食に行ってカレーうどんなどを食べた記憶が微かに彼女の中で蘇る。
「うん、教授にも友達にも散々同じこと言われたよ」
苦笑いしてみせる。
「私はね。もう自分の気持ちに嘘ついたりとかしたくなかったんだ」

「え？」
「私が歌を届けたい人は世界中の不特定多数の人じゃないし、有名なコンクールのトロフィーも賞状も名誉もいらない。私にとって大切な人にだけ、自分の歌声を届けたいって思った。すごく自己中心的な考えだけど、今の私が歌声を届けたい人はたった一人なんだ」
「それで、こっちに？」
「うん」
ひとつ深呼吸をして、真紀は言葉を続けた。
「その人のために、……英敏君のために帰ってきた」
しばらくの沈黙。近くに座っていた若い職員が何事かと二人を見つめる。このままでは様々な意味で危険だと判断した英敏が、真紀の手を引っ張って立ち上がらせる。
「え、英敏君、ちょっと」
「場所考えて、場所！」
倉庫へ向かう渡り廊下に出る。ここは勤務時間はともかく、昼休みには誰も通らないような場所。さっきの真紀の話の内容が内容だけに、ここでゆっくり話を聞くのが妥当だと英敏は判断した。
「……で。僕のために帰ってきたってのは」
「もしかして、分からない？」
真紀はいつの間にこんなに意地悪になったのか。やはり四年間会わないと人は変わるものだと思う。自分もあの時より少しは大人になったのだろうか。英敏はそう自分に問いかける。十五歳の頃のように、子供じみた考えで彼女を拒んでしまわないだろうかと。
答えは、ノーだ。
「……分かるけど、僕の見立てが違ってたら恥ずかしいからね。ちゃんと真紀の口から聞きたい。さっきみたいな婉曲的な表現じゃなく、さ」
向こうが意地悪ならば、こちらも意地悪で返してやるまでだ。
「だから、英敏君のためだけに歌ってたい」
「それだと分からないってば」

人懐っこそうなあの英敏の微笑みはあの頃と変わらないのに、今はなんとなく残酷に見える。核心に触れるあの言葉を、真紀の口から引きずり出そうとしているのだ。

はっきり言わなきゃ。

真紀も腹を決めた。

「……英敏君が好きだから、また会いたいから帰ってきた」

ここに至るまでの七年間が、どれほど長いものだったか。化粧が崩れるほど泣く真紀を宥める英敏。卒業式の前の日にもこんなことがあったな、と英敏は思う。けれど、あのときのような空虚感はもはやない。

「僕も、真紀のこと忘れたことなんてない。ずっと好きだったし、今だって好きだから」

そう言ったときの英敏の微笑みと想いだけは、七年前となんら変わることはなかった。

終楽章（後書き）

どこにでもいそうな友人たち、部活動のメンバー、そうして好きな人。そんな周囲の人によって、凍った心が少しずつ溶けていく。
そんな真紀ちゃんを描きたかったのですが…難しかったです。
私の小説の主人公は、基本的にハイテンションで明るく元気、でも勉強が苦手だったり、そういう普通の女の子ばかりなんです。
だから、このような「孤高の天才」といわれる女の子を主人公にするのは初の試みです。
非常に難しいものでしたが、これで自分の表現力が更に上がってくれれば、そう思う次第です。
何より、この薄っぺらな文章からでも、皆さんが何かを感じ取ってくだされば、それ以上の幸せはありません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9128p/

Vocalise

2011年4月27日19時11分発行